

とが む れ じょう あと かん れん い せき
梅 牟 礼 城 跡 関 連 遺 跡

発掘調査報告書 2

2014

大分県
佐伯市教育委員会



樽牟礼城全景 南西から豊後水道を望む



梅牟礼城と城下推定地 南から

とが む れ じょう あと かん れん い せき
柁牟礼城跡関連遺跡

発掘調査報告書 2

2014

大分県
佐伯市教育委員会

序 文

本書は平成21年度から25年度にかけて国庫補助事業「市内遺跡」の補助を受け、梅牟礼城跡関連遺跡で実施した確認調査、及び詳細分布調査の結果をまとめたものです。

梅牟礼城跡関連遺跡は中世佐伯氏の拠点であった梅牟礼城を中心とした遺跡群です。この一連の調査により、佐伯氏が活躍した中世の佐伯の景観をかいま見ることができました。このような調査成果が得られたのも、当市の文化財行政に対してご協力いただきました皆様をはじめ、関係された諸機関の皆様方、ならびに調査に対する地元の方々のご理解とご協力の賜物であり、深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、この報告書が郷土の歴史研究や文化財の保護と理解への一助となり、多くの方に活用されますことを心より願います。

平成26年 3月31日

佐伯市教育委員会

教育長 分 藤 高 嗣



例 言

- ・本書は、平成21年度から平成25年度まで国庫補助金及び大分県文化財補助金を受けて実施した、梅牟礼城跡関連遺跡の調査報告書である。
- ・調査と報告書作成は佐伯市教育委員会文化振興課・社会教育課が主体となって実施した。
- ・本報告書の執筆は、第1章第4節を五十川慎也が、それ以外を福田が担当した。また、第2章第5節は、別府大学文化財研究所に調査を依頼し、その成果報告書をもとに福田が執筆した。
- ・確認調査における遺構実測は、三上寺跡平面図実測を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託したほかは、福田・五十川が行った。
- ・確認調査における写真撮影は、福田・五十川が行った。
- ・出土遺物の実測・写真撮影は、五十川が行った。
- ・空中写真は、撮影を九州航空株式会社に委託したほか、国土地理院が管理する米軍及び国土地理院撮影の空中写真画像データを購入した。
- ・本報告書で用いる方位は座標北、座標は世界測地系、標高は絶対高である。
- ・調査にかかる記録類や出土遺物は、佐伯市教育委員会が保管している。

目 次

第1章	はじめに	1
第1節	調査にいたる経緯	1
第2節	調査の経過と概要	2
第3節	調査体制	3
第4節	地理的・歴史的環境	4
第2章	調査の成果	8
第1節	迫田地区の調査	8
第2節	大田地区の調査	11
第3節	八戸地区の調査	14
第4節	三上寺跡の調査	17
第5節	梅牟礼城東麓の詳細分布調査	22
第3章	まとめ	28
	写真図版	33

挿図目次

第1図	周辺遺跡地図 (S=1/50,000)	5
第2図	遺跡周辺地形図 (S=1/20,000)	6
第3図	梅牟礼城東麓調査位置及び小字分布図 (1/5,000)	7
第4図	迫田地区トレンチ位置図 (S=1/1,000)	9
第5図	迫田地区T1平面図・南東壁土層図 (S=1/60)	9
第6図	迫田地区T2平面図・北西壁土層図 (S=1/80)	10
第7図	迫田地区T3平面図・南壁土層図 (S=1/60)	10
第8図	迫田地区出土遺物 (S=1/3)	10
第9図	大田地区トレンチ位置図 (S=1/1,000)	12
第10図	大田地区T1平面図・南壁土層図 (S=1/60)	12
第11図	大田地区T2平面図・東壁土層図 (S=1/60)	13
第12図	大田地区出土遺物 (S=1/3)	13
第13図	八戸地区トレンチ位置図 (S=1/1,000)	15
第14図	八戸地区T1平面図・北壁土層図 (S=1/40)	15
第15図	八戸地区T2平面図・北東壁土層図 (S=1/40)	16
第16図	八戸地区出土遺物 (S=1/3)	16
第17図	三上寺跡参道 (S=1/5,000)	18
第18図	三上寺跡周辺地形図 (S=1/1,000)	19
第19図	三上寺跡トレンチ平面図 (S=1/200)	19
第20図	三上寺跡トレンチ土層図 (S=1/80)	20
第21図	三上寺跡出土遺物 (S=1/3)	20
第22図	三上寺跡出土遺物 (S=1/3)	21
第23図	分布調査位置図 (S=1/12,000)	25
第24図	明治期の古市地区周辺土地利用状況図	26
第25図	中世後期梅牟礼城下復元図 (S=1/12,000)	28
第26図	梅牟礼城・小田山城周辺地形図 (S=1/5,000)	32
第27図	梅牟礼城縄張り図 (S=1/2,500)	33

写真図版目次

写真図版 1	1947年梅牟礼城跡周辺空中写真（米軍撮影）	34
写真図版 2	2008年梅牟礼城跡周辺空中写真（国土地理院撮影）	35
写真図版 3	迫田地区確認調査写真	36
	T 1 完掘状況 T 1 土層 T 2 完掘状況 T 3 完掘状況 T 3 土層西端 T 3 S 5 柱穴半截 迫田地区出土遺物	
写真図版 4	大田地区確認調査写真	37
	T 1 完掘状況 T 1 土層東端 T 1 土層西端 T 2 完掘状況 T 2 土層 大田地区出土遺物	
写真図版 5	八戸地区確認調査写真	38
	T 1 完掘状況 T 1 土層 T 2 完掘状況 T 2 土層 八戸地区出土遺物	
写真図版 6	三上寺跡確認調査写真 1	39
	礎石検出状況 礎石検出状況 T 1 完掘状況 礎石半截状況 S 6 コンクリート片出土状況	
写真図版 7	三上寺跡確認調査写真 2	40
	T 2 完掘状況 T 2 土層南端 T 3 完掘状況 主面北側の法面 中位面 下位面 山頂のお堂跡 三上寺跡遠景	
写真図版 8	三上寺跡出土遺物 1	41
写真図版 9	三上寺跡出土遺物 2	42
写真図版 10	梅牟礼城跡現況写真 1	43
	主郭 主郭から小田山城を望む 主郭から三上寺を望む 主郭から古市・番匠川を望む 虎口 曲輪Ⅳ 曲輪Ⅳ南の堀切 曲輪Ⅳ南の堀切断面	
写真図版 11	梅牟礼城跡現況写真 2	44
	七つ堀口東端の豎堀 七つ堀口東端の豎堀断面 七つ堀口西から 4 本目の豎堀 七つ堀口西から 2 本目の堀切断面 七つ堀口西端の堀切 七つ堀口西端の堀切断面 梅牟礼城遠景 八戸地区 十三重塔	

第 1 章 はじめに

第 1 節 調査にいたる経緯

佐伯市は大分県の南端に位置し、東は豊後水道を望み、北は津久見市と臼杵市、西は豊後大野市、南は宮崎県延岡市と接している。平成17年に 1 市 8 町村が合併し、903.4 平方キロメートルという九州一広大な市域に約 78,000 人が住む。梅牟礼城は市内を東流する 1 級河川番匠川の河口近く、標高 223.6 メートルの山頂に築かれた山城である。

梅牟礼城は、中世の佐伯一帯を支配した佐伯氏一族の拠点として古くから知られており、昭和 44 年には弥生町指定史跡になっていた。しかし、1980 年代後半から次第に道路や住宅による開発頻度が高くなり、様々な情報の減失が懸念されていた。

このような情勢をうけて、当時の佐伯市では、梅牟礼城と周辺遺跡に対して、遺跡の広がりや時期・性格・密度といった基礎情報を得るための調査事業を実施した。国庫補助を受け、平成元年度から平成 5 年度にかけて梅牟礼城主郭や城下集落推定地における試掘確認調査を行い、さらに梅牟礼城の詳細な縄張図を作成した。これによって、主郭の使用時期が 15 世紀末から 16 世紀後半であり史書と概ね合致すること、城下のうち古市地区は成立が鎌倉期まで遡ること等が確認できたほか、梅牟礼城の縄張りの特徴を見出すことができた。領主居館に結びつく調査成果は得られなかったものの、梅牟礼城は豊後南部で勢力を誇った佐伯氏の拠点となった大規模城郭であ

り、遺構の残りもよく、遺跡としての価値は高く評価されることとなった。

さらに平成 7 年度から平成 15 年度にかけて、大分県が県内中世城館の悉皆調査を行っている。このときの調査によって、規模の大きさと残存状況の良さが再確認されたほか、梅牟礼城は大友家配下のなかでも独自色の強い勢力であった佐伯氏が自らの技術で築いた城であり、主家である大友氏が城郭建設を直接指示した豊前地方とは対照的である点が指摘されている。

平成 19 年度には、このような梅牟礼城の評価について、旧弥生町民だけでなく新佐伯市民にたいして周知するため、「梅牟礼城シンポジウム」を開催した。梅牟礼城の特徴や佐伯市の歴史の中での位置づけ、これまでの調査によって明らかになったことが報告されたほか、パネルディスカッションでは領主居館の位置や城下集落の範囲の推定が課題として述べられた。

その後梅牟礼山の東山麓では東九州自動車道の建設事業が本格化し、平成 21 年度から大分県教育庁埋蔵文化財センターが本調査を実施している。梅牟礼遺跡内では 3 地点で本調査が実施され、現在整理作業が進められている。詳細は報告書刊行を待たねばならないが、いずれも 15 世紀から 16 世紀の家臣団居住地の可能性が高い。（注 1）

こうした中、佐伯市では平成 21 年度から国庫補助を受けて再び梅牟礼城関連遺跡の調査を開始した。今回の調査は、平成元年度から平成 5 年度までの調査では明らかにし得なかった、居館を含めた城下の景観をより詳細に理解することを目的としたものである。

注 1 大分県教育庁埋蔵文化財センター小柳和宏氏・高橋信武氏のご教示による。

【参考文献】
大分県教育庁埋蔵文化財センター 2004 『大分の中世城館』総論編
佐伯市教育委員会 1994 『梅牟礼城関連遺跡発掘調査報告書』

第2節 調査の経過と概要

各年度の調査の概要は以下のとおりである。

《平成21年度》

平成元年度から平成5年度までの調査を振り返り、課題となっていた城下集落の様相を明らかにするため、調査が行われていない地区のうち、迫田地区での調査を実施した。調査の結果、中世に遡る遺構や整地層の検出はなかったが、近世遺物に混じって若干の中世遺物の出土があり、周囲には中世のものを含む五輪塔が散在している。

《平成22年度》

平成22年度は大田地区を対象とした。大田地区では、平成21年度に大分県埋蔵文化財センターの発掘調査によって、曳地館の西山麓に屋敷地が確認されており、その広がりを確認することも視野に入れた。結果、屋敷地はほぼ県の調査範囲に収まることが確認されたほか、曳地館跡へつながる尾根の鞍部を人工的に造り出した可能性がある。また、下位の平坦面には中世の整地層が広がる可能性がある。また、館を含めた城下の構成を探るため、梅牟礼城東麓周辺地区を対象とした詳細分布調査を別府大学文化財研究所に委託して実施した。

《平成23年度》

平成23年度は八戸地区で調査を実施した。比較的狭い平坦面であるが、近世遺物に混じって中世遺物が出土する。中世遺物包含層から柱穴や土坑等を検出したが、遺物量が非常に少なく断定は難しい。調査中、記録的な寒波の影響で佐伯地方では十数年ぶりの積雪となった。昨年度に続き、梅牟礼城東麓周辺地区での詳細分布調査を別府大学文化財研究

所に委託して実施した。

《平成24年度》

平成24年度は三上寺跡の調査を行った。人為的な平坦面に多量の埋納銭と鏡の出土があり、梅牟礼築城者とされる佐伯惟治にまつわる伝承もあるなど、佐伯氏と関わりの深い山岳寺院の存在が推定されていた。調査の結果、寺院建築物と思われる礎石の一部と、古代から中世の遺物を含む整地層を確認した。中世寺院と考えられる礎石建物の存在が明らかになったことに加え、山岳信仰が古代にまで遡る可能性を考えることができる。また、梅牟礼城と周辺地形の理解のため、空中写真撮影を実施した。

《平成25年度》

平成21年度から24年度までの調査成果をまとめ、整理作業と報告書作成を行った。

第3節 調査体制

調査は以下の体制で実施した。

【調査主体】

佐伯市教育委員会

【調査指導】

豊田 寛三（大分大学教育福祉科学部教授）（平成21年度）
（別府大学学長）（平成22～25年度）

後藤 宗俊（別府大学名誉教授）（平成21～25年度）

宮武 正登（佐賀県教育庁社会教育・文化財課）（平成21～25年度）

田中 祐介（大分県教育庁文化課）（平成21年度）

後藤 晃一（大分県教育庁文化課）（平成22～23年度）

横澤 慈（大分県教育庁文化課）（平成24～25年度）

【調査事務】

佐伯市教育委員会文化振興課（平成21～23年度）

竹中 伸吾（文化振興課長）（平成21年度）

河野 宜弘（文化振興課長）（平成22～23年度）

大石 定廣（文化振興課参事）（平成21年度）

今山 勝博（文化振興課課長補佐）（平成23年度）

（文化振興課係長）（平成21～22年度）

吉武 牧子（文化振興課係長）（平成23年度）

（文化振興課主査）（平成21～22年度）

福田 聡（文化振興課主任）（平成23年度）

（文化振興課事務員）（平成21年度～22年度）

五十川慎也（文化振興課嘱託職員）（平成21年度～23年度）

佐伯市教育委員会社会教育課（平成24～25年度）

福嶋 裕子（社会教育課長）（平成24年度）

清家 隆仁（社会教育課長）（平成25年度）

今山 勝博（社会教育課課長補佐）（平成24年度）

淡居 宗則（社会教育係長）（平成25年度）

吉武 牧子（社会教育係長）（平成24～25年度）

福田 聡（社会教育課主任）（平成24～25年度）

五十川慎也（社会教育課嘱託職員）（平成24～25年度）

このほか、事業全体を総括して、文化庁文化財部記念物課の指導・監督を受けた。また、出土遺物及び周辺での発掘調査成果については、大分県教育庁埋蔵文化財センター後藤一重氏、高橋信武氏、小柳和宏氏に多大な助言を頂いた。記して感謝いたします。

第4節 地理的・歴史的環境

【地理的環境】九州一広大な面積をもつ本市は、番匠川下流域の平野部を中心に発展した市街地地域と、西部・南部の山間部地域、東部の海岸部地域とに大きく区分される。

梅牟礼城跡関連遺跡は、番匠川とその支流の一つである門前川流域に展開している。門前川流域は河川の浸食と堆積で南北に細長い谷底平野が形成され、その平野部分に水田が広がっていて、山裾の緩斜面や斜面を削りだした平地部分と谷南端の微高地に居住地が広がるといった景観があった。しかし近年高速道路の開通や大型商業施設の建設など、大きな変化が進みつつある地域である。

【歴史的環境】佐伯の歴史を遡ると、旧石器時代に関しては遺物が僅かに散見されるものの生活を伴う遺跡は未だ発見されていない。縄文時代になると、遺跡の多くが山間部の台地や段丘上にみられ沿岸部では土器など遺物の発見が見られる程度である。佐伯門前遺跡や森の木遺跡では早期の土器群と共に集石遺構が確認された。その他、下城遺跡や長良貝塚でも縄文時代の遺物が発見されている。弥生時代になると、県南地方にも多くの遺跡がみられるようになり、特に番匠川や堅田川流域には県下を代表する遺跡がみられる。堅田川流域にある下城遺跡や長良貝塚、そして城西麓に位置する白濁遺跡では住居跡や土器と共に貝塚も確認され、そこから出土した多くの獣骨や魚類の骨・貝類は、当時の食生活の様子を明らかにした。また、下城遺跡で発見された甕や壺は、豊後地域の弥生時代前期～

中期を代表する「下城式土器」と命名され、大分県を代表する弥生時代の土器形式名として名を残している。古墳時代になると、大型の古墳は存在しないが大入島や番匠川・堅田川河口周辺の丘陵上や島嶼部に古墳が存在するようになる。萩山古墳は前期末から中期、宝剣山古墳と檜野古墳は中期後半頃の築造と考えられる。檜野古墳の溝から出土した土師器は宮崎平野を中心とした地域に分布する土器に系譜を求められ、両地域の交流を考える上で重要な資料である。また、後期のものとしては雨龍山と呼ばれる独立状の小丘陵に営まれた上小倉横穴墓群がある。その他、下久部岡ノ谷で出土したと伝わる舟形石棺が知られているが詳細は不明である。集落遺跡としては汐月遺跡で住居址が確認されている。奈良・平安時代では当時の佐伯地域は律令制下における海部郡の穂門（ほと）郷に属していたと考えられるが、奈良時代以前の史料や文献には「佐伯」の地名はどこにも見られない。この地域に「佐伯」の地名を確認できるのは平安時代にはいつからで、平安時代後期の『本朝世紀』に「賊徒、今月（九月）六日に当国豊後海部郡佐伯院に襲いきたり」とあるのがそれである。この院の推定地には、奈良時代の堀立柱建物跡や「吉」と墨書された土師器などが検出された汐月遺跡や上の台遺跡が有力視されている。そのほかに、白濁遺跡からは奈良時代末～平安時代中期の蔵骨器4点が発見されている。中世になると佐伯地域は佐伯荘と呼ばれるようになり、そこを支配したのが在地勢力として力を延ばしてきた佐伯氏一族であった。



1. 佐伯城跡	2. 佐伯城下町	3. 白濁遺跡	4. 萩山遺跡群
5. 宝剣山古墳	6. 大友山砦跡	7. 瀬戸遺跡	8. 岡ノ谷古墳
9. 中山砦跡	10. 下城遺跡	11. 八幡山城跡	12. 長良貝塚
13. 上ノ台館跡	14. 上ノ台遺跡	15. 汐月遺跡	16. 宇山城跡
17. 元越遺跡	18. 長谷山際遺跡	19. 高城跡	20. 檜野古墳
21. 三上寺跡	22. 二上寺跡	23. 佐伯門前遺跡	24. 古市遺跡
25. 十三重塔	26. 木戸城跡	27. 曳地館跡	28. 梅牟礼遺跡
29. 梅牟礼城跡	30. 小田山城跡	31. 小田山館跡	32. 上小倉横穴群
33. 平城跡	34. 竹田城跡		

第1図 周辺遺跡地図 (S=1/50,000)

【参考文献】
 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2005『津久見門前遺跡 瀬戸遺跡 佐伯門前遺跡』
 佐伯市教育委員会 1994『梅牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書』
 佐伯市教育委員会 2003『佐伯城下町遺跡 山中家屋敷跡・竹中家屋敷跡』
 佐伯市教育委員会 2010『梅牟礼遺跡』

第2章 調査の成果

第1節 迫田地区の調査

迫田地区は梅牟礼山の東南麓に開けた谷筋の一つである。比較的広く開けた扇状地であって、概ね南半分は田、北半分は宅地と畑である。平成19年度のシンポジウムでも調査の必要性が指摘されていた。後世の軍記物である『梅牟礼実録』では、佐伯惟治が凶田(さこた)に祖母嶽大明神を勧請したとされる。トレンチは休耕地となっている平坦な場所に3箇所を設定した。(第4図)

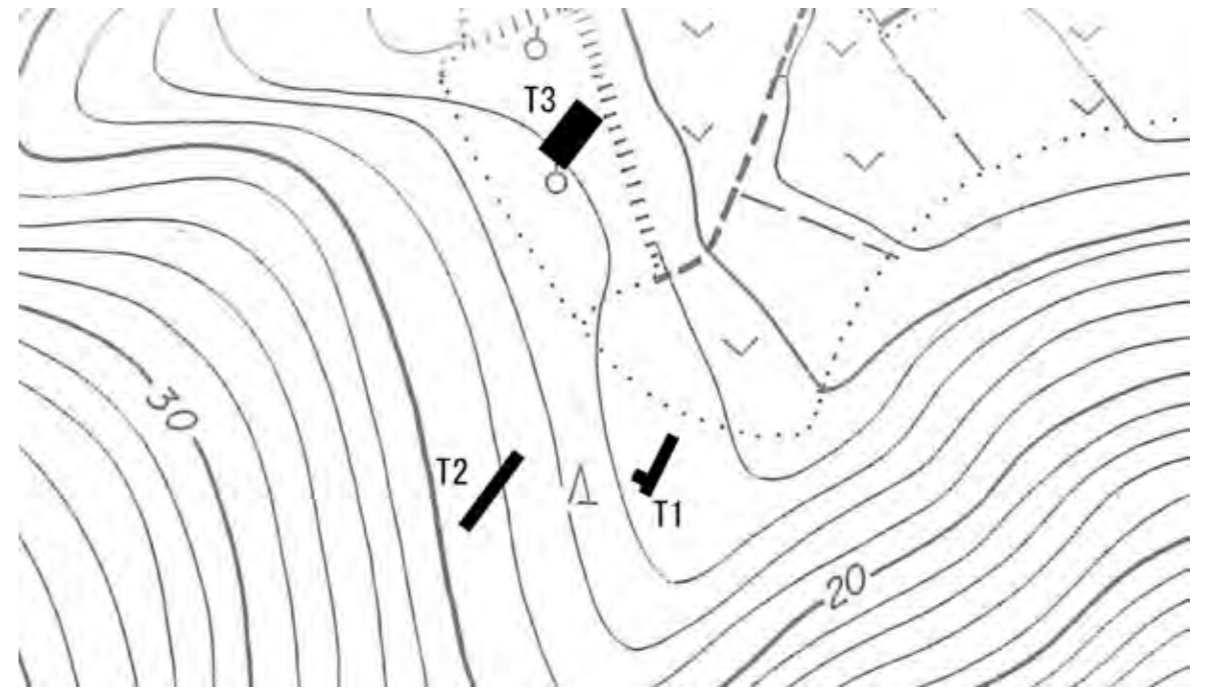
T1(第5図)は谷筋の中にあたり、現在は草木で覆われている。6.5m×1mの規模で設定し、一部を北西に拡張した。表土(第1層)と耕作土(第2層)の下には第3層・第4層が東ほど厚く堆積する。第5層から第8層は傾斜にそった堆積であるが、いずれも人為的な整地層である。第9層は水気を多く含む砂礫層であり、地山であろう。検出した遺構は第2層上面で近世遺物の小破片を含む土坑を1基検出したのみである。遺物は第2層から第5層まで、近世の遺物に混在して中世の遺物が少量出土した(第8図1~3)。1・2は土師質土器の坏、3は青磁の碗である。いずれも15世紀に位置づけられる。T1周辺では、おそらく近世の段階で谷を埋めて、小規模の田畑を造作したものと考えられる。

T2(第6図)はT1よりもさらに奥まった山裾緩斜面に10m×2mで設定した。トレンチの東側から南側にかけては3~4mほどの急な立ち上がりで、人為的な地形である。トレンチを掘削した結果、表土(第1層)の下位には、南西斜面を削って平坦に造成した際の層と考えられる整地層(第2層)が薄くあるのみで、地山に達している。遺構は全く

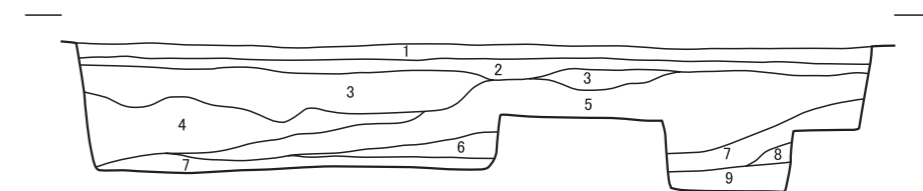
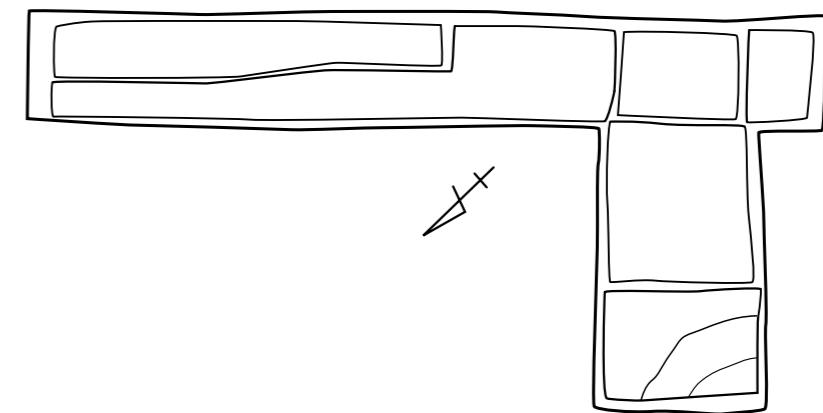
検出されず、トレンチ中央で段差を確認した。遺物の出土も少なく、近世から近代の遺物が出土した。第8図4は第2層から出土した肥前系の香炉である。他にも18世紀から19世紀頃の陶磁器片が散見されることから、この周辺は近世末頃に形成された地形であろう。

T3はT1からやや下った位置の緩斜面に8m×2.5mで設定した(第7図)。表土(第1層)と耕作土(第2層)を除去すると、第3層と第4層をほぼ水平に検出した。締まりが強く第4層が東に下っていく部分に、第3層が乗っており、面積を拡張するために造成されたものと考えられる。遺構は第3層・第4層上面でピットを多数検出したが、掘立柱建物として並ぶものは無い。いくつかのピットでは柱痕が観察できることから、小規模な建物はあったことが推定できる。やはり出土遺物は少なく、第1層から出土した近世陶磁器の小片少数のみであった。図化するものは第8図5のみで、18世紀末~19世紀前半のいわゆる小杉碗である。ピットや整地層の時期を決定するには不足しているが、第4層の土質は、周辺地区で確認された中世の遺物を含む整地層とよく似ている。中世期に小規模の造成が行われた可能性もあるが、主たる利用が開始されたのは近世以降と考えるべきであろう。

なお、T3付近に小さなお堂があり、五輪塔の火輪3基分が重ねて祀られている。周辺にも五輪塔の残欠が点在し、中世末頃のものも含まれる。現在の梅牟礼山周辺の集落は、尾根の東から南の裾を取り巻くように家屋が建てられており、このような土地利用のあり方は近世以前から同様であろう。さらに中世まで遡ると考えるならば、T3は集落を見下ろす緩斜面にあたり、点在する五輪塔は屋敷墓であったとも考えられる。

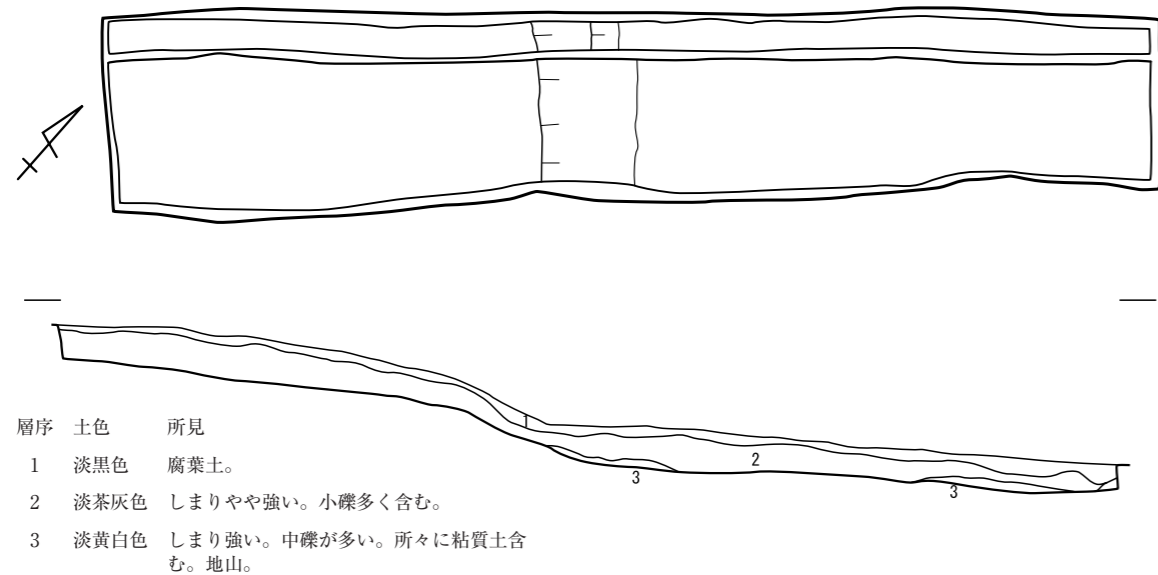


第4図 迫田地区トレンチ位置図 (S=1/1,000)

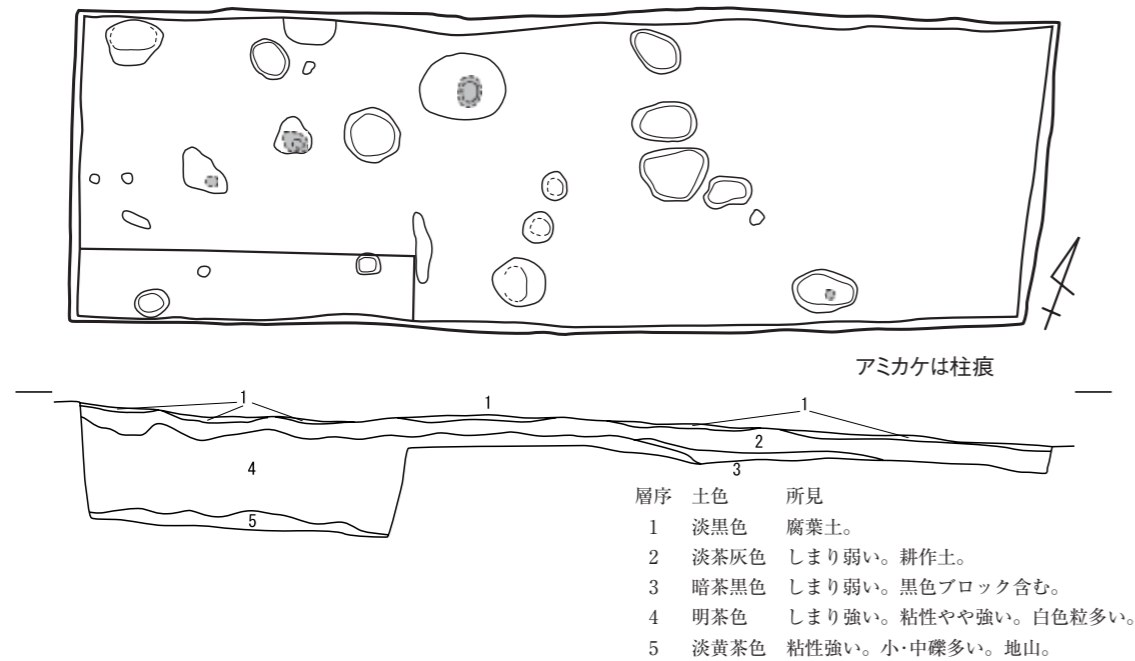


層序	土色	所見	層序	土色	所見
1	暗褐灰色	しまり・粘性強い。小礫含む。作土層。	6	灰褐色	粘性やや強い。小礫少量。
2	暗黄灰色	しまり強い。焼土ブロック少量。床土層。	7	暗茶褐色	粘性やや強い。小礫・アカホヤ・粘土ブロック・鉄分少量。
3	褐灰色	しまり強い。灰色粘土ブロック多い。	8	黒褐色	しまり・粘性弱い。小礫・炭少量。
4	灰褐色	しまり強い。小礫・アカホヤ・炭少量。	9	暗赤褐色	しまり・粘性弱い。砂礫層。
5	暗褐色	しまりやや強い。小礫・アカホヤ・鉄分少量。			

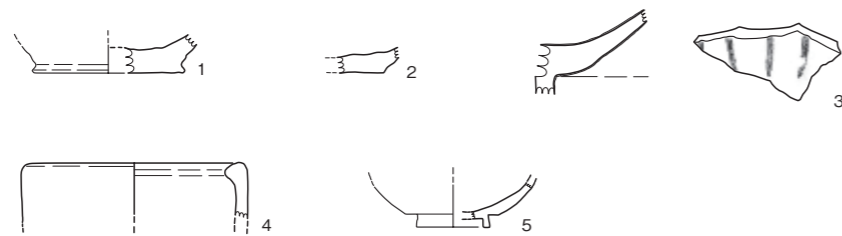
第5図 迫田地区T1平面図・南東壁土層図 (S=1/60)



第6図 迫田地区T2平面図・北西壁土層図 (S=1/80)



第7図 迫田地区T3平面図・南壁土層図 (S=1/60)



第8図 迫田地区出土遺物 (S=1/3)

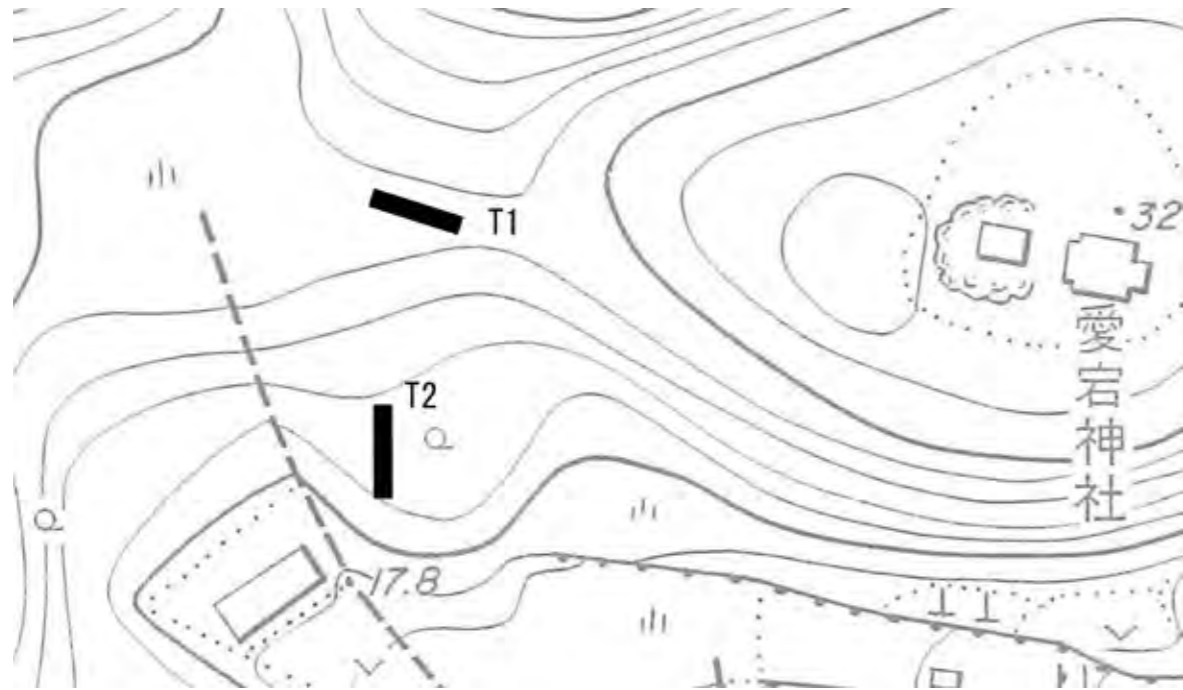
第2節 大田地区の調査

大田地区は梅牟礼山東南麓の谷筋のうち、曳地館跡へとつながる尾根の南側である。曳地館跡には愛宕神社が鎮座し、明らかに人為的な削平による平坦面があるが、平成元年度の調査では18世紀代の近世陶磁器が多量に出土し、中世に遡る遺構は確認されなかった。しかし平成21年度に西の山裾緩斜面において、大分県教育委員会によって高速道路建設に伴う本調査が実施され、15世紀から16世紀代の家臣団の居住地と目される建物跡等が確認されている。確認調査トレンチを設定したのは、県教育委員会の調査範囲と曳地館跡の中間および、その南側の平坦地である(第9図)。なお、大田地区南側の低地には国道のバイパスが建設されるため、県教育委員会が確認調査を実施しているが、いずれも旧水田層があるのみで、安定した地盤はない。

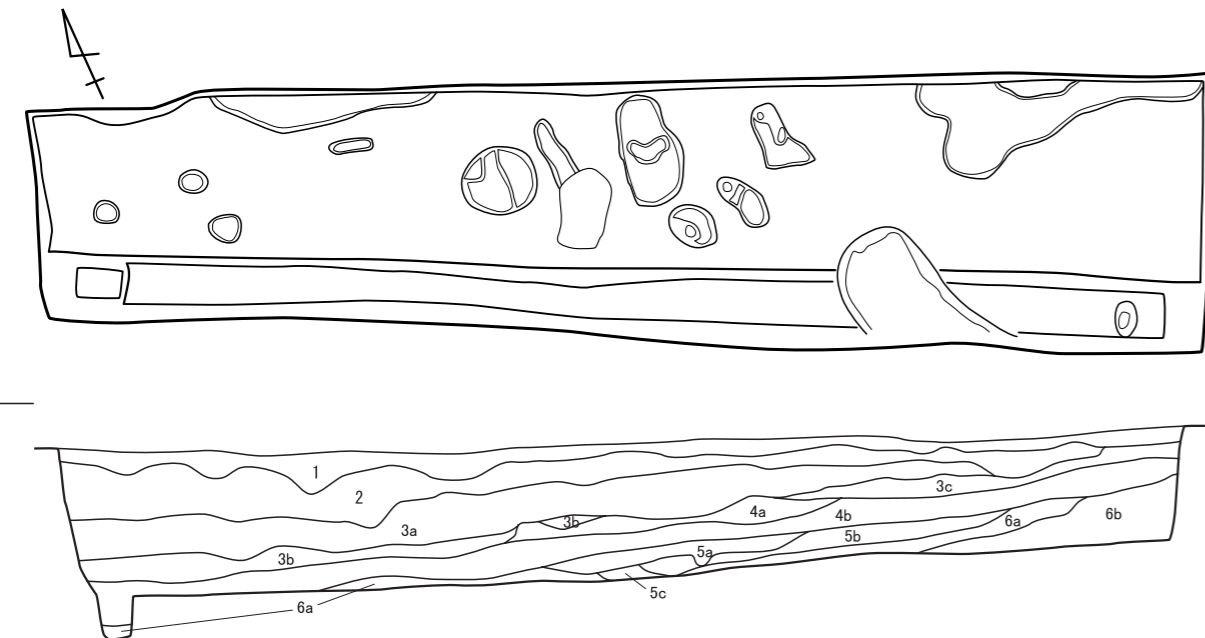
県教育委員会の調査地と曳地館跡との中間地点に、2m×10mの範囲で設定したものをT1とした(第10図)。東には愛宕神社の裏へつながる斜面があり、現状は藪である。西は2m程の段差を挟んで県教育委員会の調査範囲となった平坦面が広がる。トレンチを掘削した結果、曳地館側から西に向かって厚く堆積する整地層を複数確認した。地山(第3層～第4層)も同様に、東から西に向かって傾斜している。遺構は土坑やピットを検出したが、いずれも不整形で樹根の可能性も高い。遺物の大半は第1層で出土した近世から近代にかけてのもので、第12図1は明治期の重箱蓋である。1点のみ15世紀の青磁香炉(第12図3)が樹根から出土している。従って整地の時期も不明確であるが、土質は県教育委員会が調査した屋敷地の整地に類似する。整地層の下位は褐色ローム層から地山の岩盤に続いている。これらの整地層を積極的

に評価するならば、曳地館側から西に向かって下がる斜面に盛土による整地を行うことで、現地形のようなフラットな鞍部を作り出していると考えられる。

T2は、県教育委員会の調査地南東の斜面に造られた小規模のテラスに設定した(第11図)。テラスは斜面に2段が確認でき、トレンチを設定したのは面積が広い下段である。西側にはテラスを削り落として建てたらしき小屋があり、本来のテラスは西の山裾まであったと考えられる。現況は上下段ともに竹が密生している。トレンチは比較的竹の密度が低い場所を選び、南北方向に2m×10mで設定した。表土(第1層)を除去すると、第2層中にコンクリートの建物基礎を検出した。さらに下層の第3層上面でいくつかの小規模な整地層を確認したが、遺構とは認められない。さらに掘削を進め、一部を岩盤上面まで掘り下げたが、小穴を第4層で検出したのみである。遺物は近世の陶磁器がわずかに出土したほか、第2層から中世の土師質土器(第12図4・5)を確認した。どちらも15世紀に位置づけられる小皿であろう。遺構・遺物ともに希薄ではあるが、地形の造作が中世に遡る可能性はある。

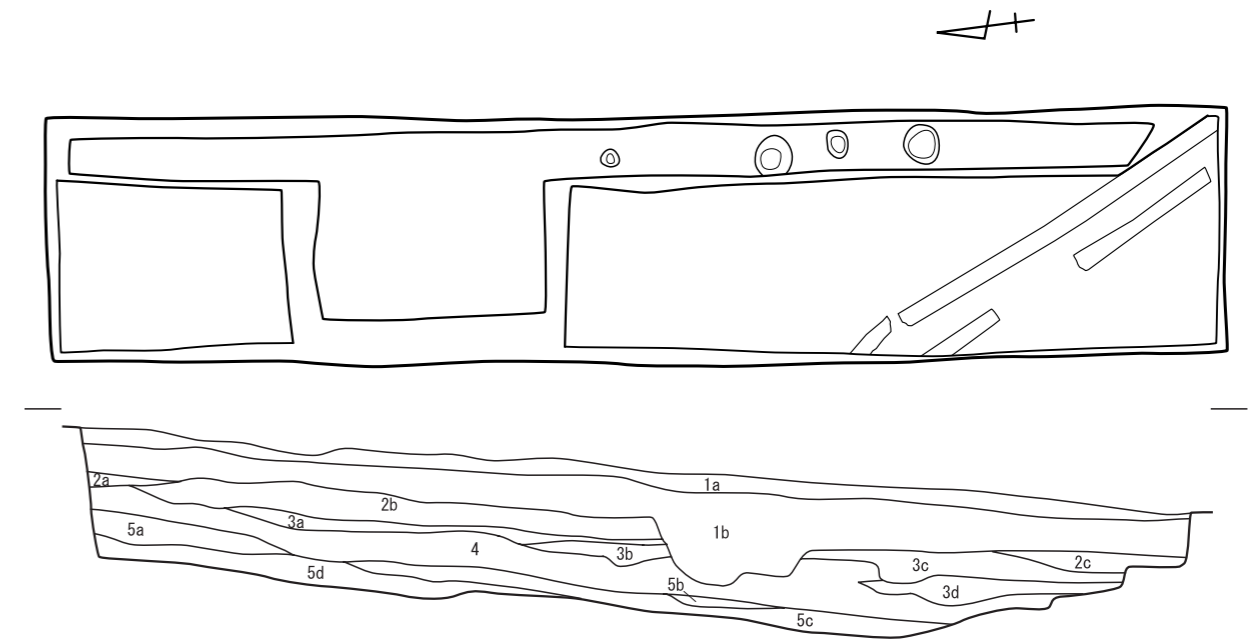


第9図 大田地区トレンチ位置図 (S=1/1,000)



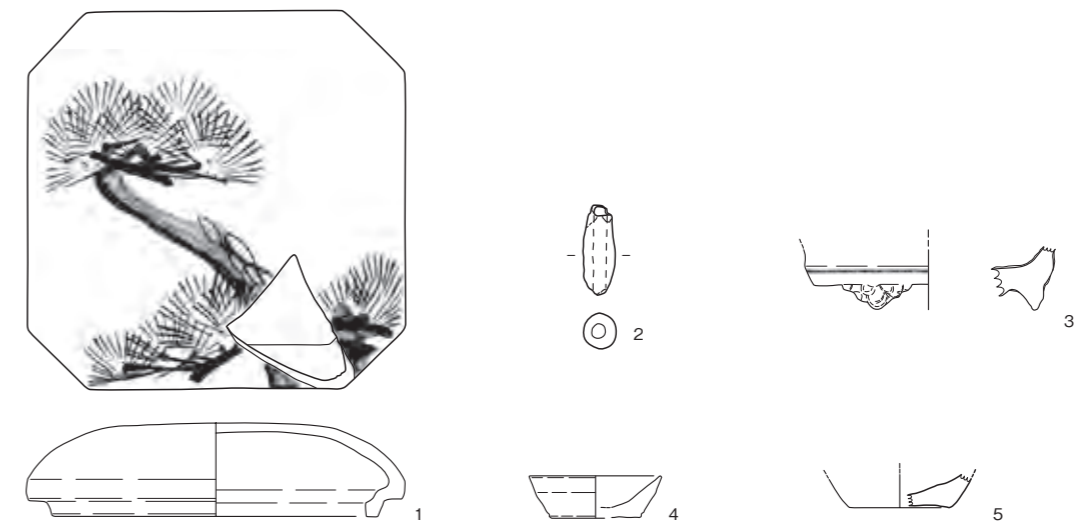
層序	土色	所見	層序	土色	所見
1	暗褐色	しまりやや強い。粘性弱い。	4b	橙褐色	しまりやや弱い。粘性弱い。
2	茶褐色	しまり・粘性弱い。粒が細かい。	5a	褐色	しまり・粘性弱い。わずかに砂質。
3a	黒褐色	しまりやや強い。粘性なし。	5b	灰黄褐色	しまり弱い。粘性なし。砂質。
3b	暗灰褐色	しまりやや弱い。粘性なし。	5c	橙褐色	しまりやや弱い。粘性やや強い。
3c	暗茶褐色	しまりやや強い。粘性弱い。小礫・ブロック土を含む。	6a	褐灰色	しまりやや強い。粘性弱い。やや砂質。
4a	灰褐色	しまり・粘性弱い。	6b	灰褐色	しまり・粘性強い。小礫含む。

第10図 大田地区T1平面図・南壁土層図 (S=1/60)



層序	土色	所見	層序	土色	所見
1a	黄褐色	しまり強い。粘性弱い。	3c	灰褐色	しまりやや弱い。粘性弱い。褐色ブロックを少量含む。
1b	暗灰褐色	しまり強い。粘性弱い。	3d	黒灰色	しまりやや弱い。粘性弱い。
2a	暗褐色	しまり強い。粘性強い。	4	暗灰褐色	しまりやや強い。粘性弱い。小礫を少量含む。
2b	暗茶褐色	しまり・粘性やや強い。	5a	暗茶褐色	しまり・粘性やや弱い。
2c	暗褐色	しまり強い。粘性弱い。	5b	褐色	しまり強い。粘性弱い。黄褐色ブロックを含む。
3a	明褐色	しまり強い。粘性やや強い。黄褐色ブロックを多く含む。	5c	茶褐色	しまり・粘性弱い。
3b	暗灰褐色	しまり・粘性やや強い。	5d	暗褐色	しまりやや強い。粘性やや弱い。小礫多く含む炭化物を若干含む。

第11図 大田地区T2平面図・東壁土層図 (S=1/60)



第12図 大田地区出土遺物 (S=1/3)

第3節 八戸地区の調査

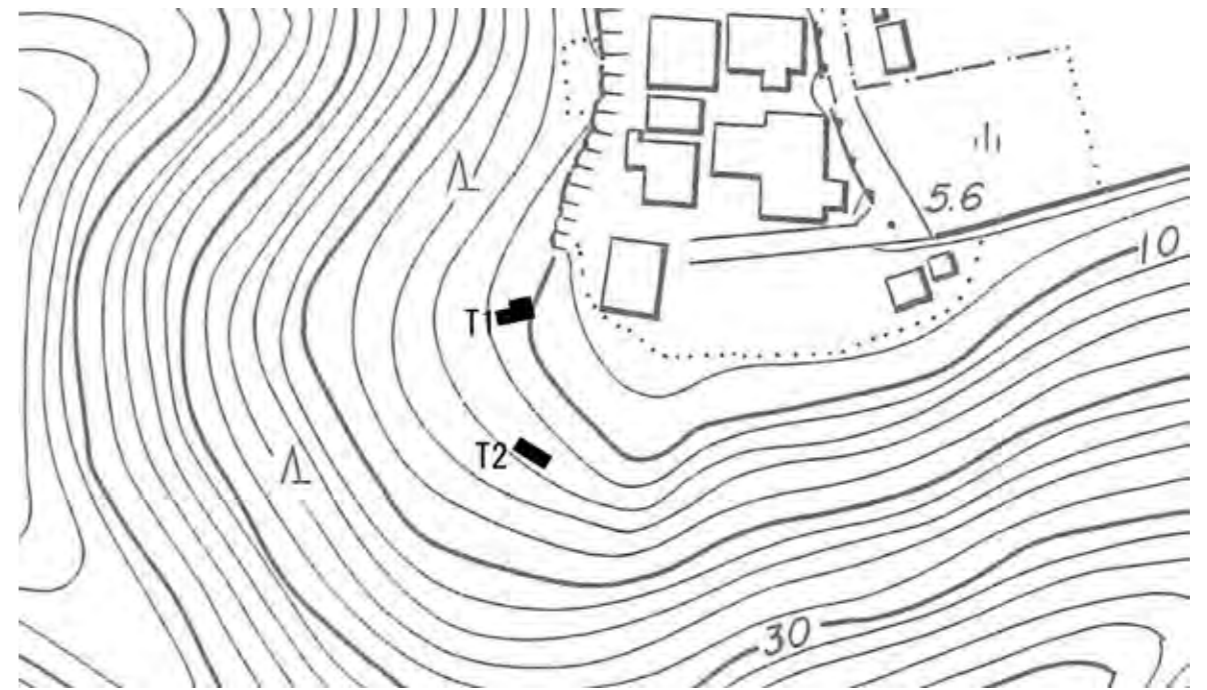
八戸地区は梅牟礼山東麓の尾根に区切られた集落のうち、最も南に位置する地区である。梅牟礼城への登山道からは南に800mほど離れるが、北東には古市地区と近接し、南東の尾根先端には十三重塔があることから、居館推定地の一つに挙げられていた地区である。現況では地区のほぼ全体が宅地となっているが、昭和50年代頃までは、地区の南半が水田で、北西から西にかけての山裾微高地に住宅が建てられていた。住宅の后背地には斜面を削って狭小な墓地を造っている。

トレンチは住宅として利用されている低地から西に奥まった場所にある、テラス状の平坦地に設定した(第13図)。T1は宅地の後背に東西方向に2m×5mの規模で設定し、後に一部を北側に拡張した(第14図)。表土下位には近世から現代の遺物を含む整地層(第2層)があり、トレンチの西端ではその下位に岩盤が現れる。東に向かって下がる岩盤の上に、整地層(第3層・第4層)を盛ってテラスを成形していると考えられる。第Ⅲ層と地山上面で遺構検出を試み、第3層上面で小穴や不整形土坑を確認したほか、第5層で不整形の土坑を検出したが、いずれも樹根の可能性が高い。遺物は第2層から近世から現代にかけての遺物が少量出土した(第16図1～5)。近世以降に、畑地や植林のために地形を造成したものであろう。

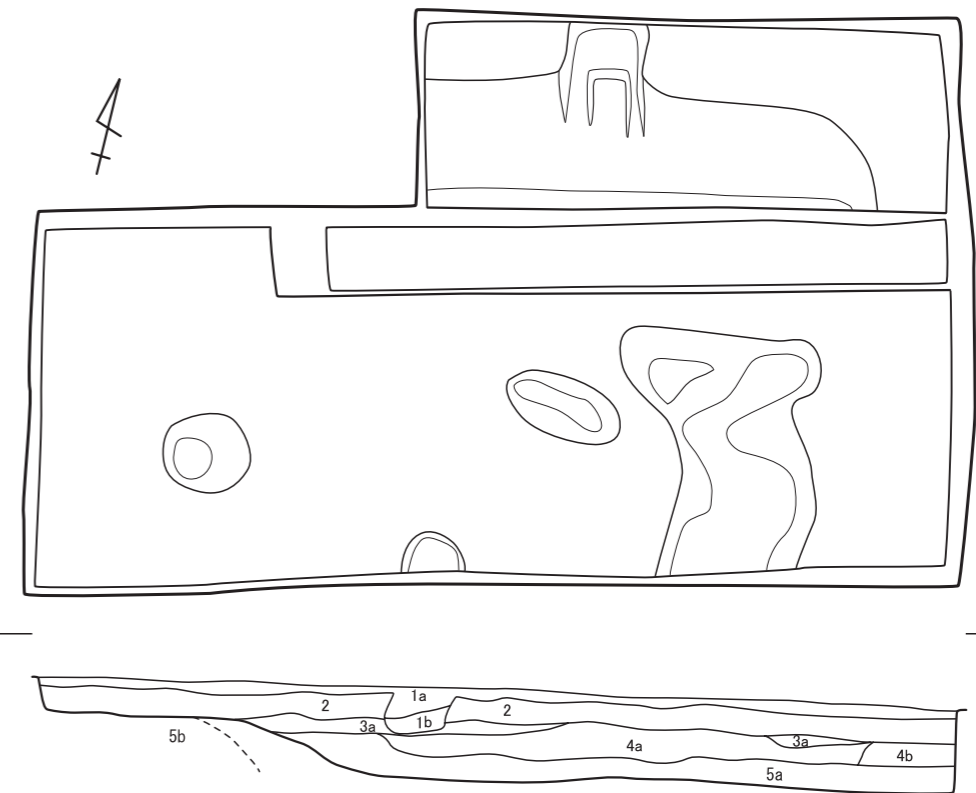
T2はT1の南側、ほぼ同じレベルにあり比較的広い平坦地に2m×5mで設定した(第15回)。こちらも現在は杉が植えられている。周辺には、南斜面との境目に石組井戸があり、近代の墓石が少数散乱している。近隣住民によると、戦時中に兵舎が建てられて、井戸はその際に掘られたものだという。調査の結果、表土(第1層)の下位に近代整

地層(第2層)、近世整地層(第3層～第5層)がある。第3層は締まりが弱く、畑土のような耕作土ではないかと考えられる。さらに近世遺物を含む第5層上面でピット(S1・S4)と土坑(S5)を検出した。ピットはいずれも柱痕があり、間隔は1.8mを測るが、全体のプランが不明であるため1棟の掘立柱建物とは断定できない。第5層掘削後、第6層上面で土坑(S7)を検出した。やや直線的な長楕円形を呈し、溝状遺構の可能性もある。遺物は整地層出土のものが大半で、遺構内出土遺物は少ない(第16図6～13)。6～8は第3層出土の肥前系の磁器碗・皿である。9～11は第5層出土で、10は陶胎染付碗、11は陶製灯火具の底部である。6～8・10・11は近世末頃の所産であろう。第5層出土の9と第6層出土の12は土師質土器である。9は坏、12は小皿の可能性が高いが、小片であり判断は難しい。9は厚い底部からまっすぐ立ち上がる器形と考えられ、15世紀代に、12も近い時期に位置づけられる。13は第6層出土の土錘である。T2の周辺は中世後半には整地による平坦面が造られ、おそらく尾根の南斜面を取り巻くように西の山裾まで広がっていた可能性が考えられる。その後、近世に畑として利用され、戦時中には兵舎が建ち、解体されて現在に至っている。

なお、T1の北側には近世から近代の墓石が多数並び、T2の南西斜面にも複数の墓石を確認した。これらの墓地については、迫田地区の調査と同じように、屋敷墓としての性格を考えることができるだろう。

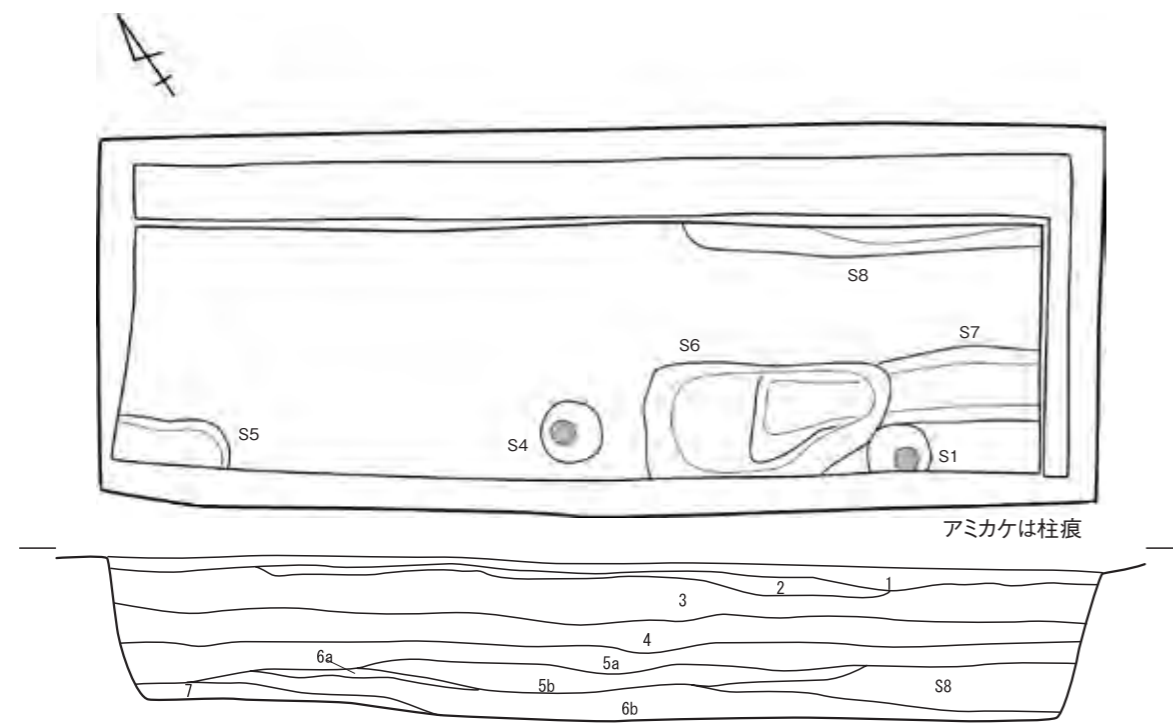


第13図 八戸地区トレンチ位置図 (S=1/1,000)



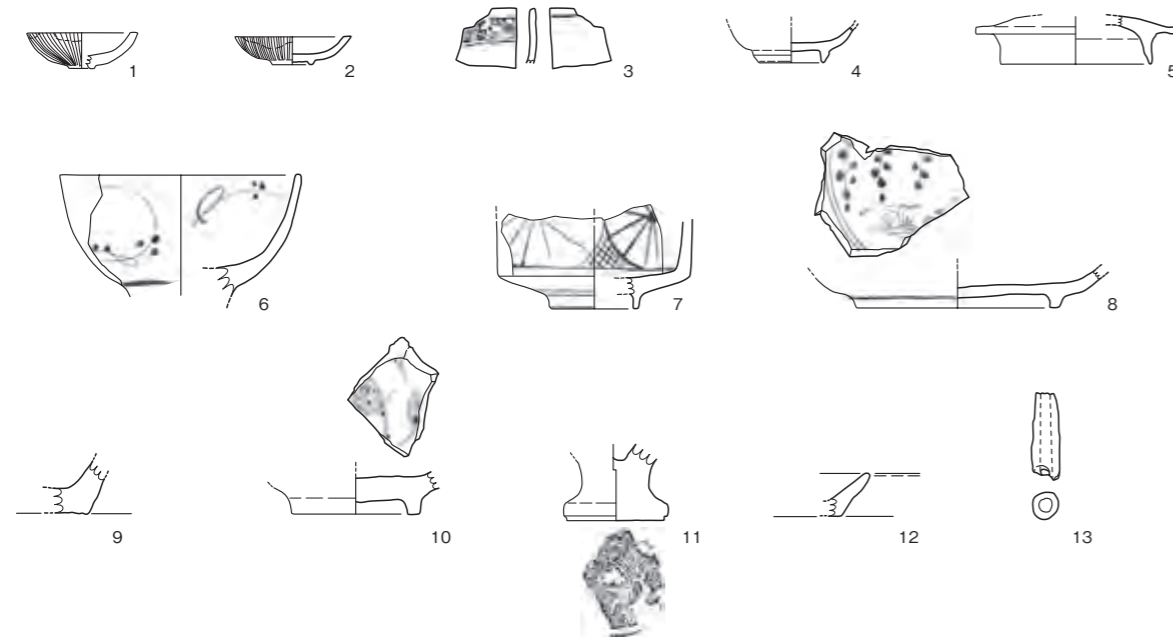
層序	土色	所見	層序	土色	所見
1a	黒褐色	しまり弱い。粘性なし。表土。	4a	褐色	しまりやや強い。粘性弱い。
1b	暗褐色	樹根	4b	褐色	しまり強い。粘性弱い。
2	暗褐色	しまり・粘性弱い。	5a	明赤褐色	しまり・粘性強い。地山?
3a	茶褐色	しまり・粘性やや強い。明赤褐色ブロックを含む。	5b	明黄褐色	しまり強い。粘性弱い。礫多く含む。岩盤上面。
3b	明褐色	しまり強い。粘性弱い。小礫多く含む。			

第14図 八戸地区T1平面図・北壁土層図 (S=1/40)



層序	土色	所見	層序	土色	所見
1	黒褐色	しまり・粘性弱い。	S8	暗灰色	しまりやや弱い。粘性弱い。小礫多く含む。
2	茶褐色	しまり強い。粘性弱い。	6a	明褐色	しまり・粘性やや弱い。やや砂質。
3	暗褐色	しまり・粘性弱い。	6b	茶褐色	しまりやや強い。粘性やや弱い。明赤褐色ブロック含み、小礫多く含む。やや砂質。
4	褐色	しまり強い。粘性なし。	7	赤褐色	しまり強い。粘性やや強い。礫多い。
5a	暗褐色	しまりやや強い。粘性弱い。			暗褐色ブロック・炭化物を含む。
5b	暗茶褐色	しまり強い。粘性弱い。			

第15図 八戸地区T2平面図・北東壁土層図 (S=1/40)



第16図 八戸地区出土遺物 (S=1/3)

第4節 三上寺跡の調査

三上寺跡は梅牟礼城から東に約1.5km、標高約162mの尾根頂部に位置する。尾根の南西方向には二上寺跡と伝わる平坦面があり、南の麓集落の中には僧坊があったとする伝承もある。また、佐伯惟治と親しい関係にあった春好という僧侶が住んでいた場所で、数十年前までは春光を供養する小さな祠があったとも言われる。さらに1940年頃に、近隣の住民数名が、三上寺跡に残る地蔵（地蔵浮彫型墓碑）に参拝した際に、鏡7面と古銭797枚を掘り出している（注：現在は寄贈され、佐伯市が所蔵している）。こうした情報を得たことがきっかけとなって、平成5年に県教育委員会が三上寺跡の踏査と、出土した鏡・古銭の調査を行っている。調査の結果、三上寺跡は尾根頂部の南半を削り落として形成された主面と、同様に南の斜面を削って形成された中位面、下位面で構成され、各面の東端を参道がつないでいることが確認された。掘り出された鏡と古銭は、それぞれ12世紀から13世紀、前11世紀から13世紀初頭の資料で、一括して埋納された時期は13世紀前半であろうと推定されている。さらに、三上寺の性格を山岳信仰にもとづく密教系寺院とし、主要堂宇の位置を主面に想定するが、当時の調査では発掘は行われなかった。

三上寺跡の現況は雑木林となっているものの、後世の地形改変は見られず、主面から下位面、参道ともに旧来の形状が良好に残っている。麓の集落から山上へつながる参道があり、三合目程までは近世から近代の墓地の中を通る。中腹からはかなり急な斜面を登る登山道となり、途切れながらもかろうじて道跡を確認できた（第17図）。また、主面として削り残された尾根の最高所には、トタン板とコンクリートブロック、モルタル瓦と木材が

集積しており、数十年前まで参拝された社があったことが窺える。主面の入口部にも石組があり、ガラス製の酒瓶が埋められている。

平成24年度の調査では、三上寺跡の遺構の有無の確認と、鏡・古銭出土位置の確認を目的として、主面にトレンチを設定した（第18図）。東西方向にT1、南北方向にT2とT3を設定した。いずれのトレンチでも腐植土及び風化や樹根による攪拌を受けた第1層の下位に、中世の整地層である第2層が主面全体に広がっている。第1層は北の法面からの崩落土であろう。第2層上面はほぼ水平に整えられ、北側ほど締まりが強く小礫の混入頻度が高い傾向にある。第2層の下位には地山を確認し、三上寺跡の主面が中世の整地層のみで形成されていることがわかる。

トレンチ内の第1層を除去し、第2層上面まで掘削する過程で、第2層中に据えられている建物礎石を3基検出した。第1層の堆積は非常に薄く、礎石の多くは第1層上面に頭を出している状態だったが、礎石の輪郭を明確に捉えたのは第2層上面である。礎石は主面中央からやや西よりで直線上に並んで検出された。また、礎石のうち1基を対象にサブトレンチを設定し、礎石の下部構造や据え方を検証した。その結果、下部構造も掘込みもなく、整地作業と並行して礎石を据えたと考えられる。

ここまでの調査の過程で、第1層の堆積が非常に薄く、礎石は地表に露出している可能性が高いことが分かったため、トレンチ調査に加えて、主面の地表面に堆積している落ち葉を除去し、地表に露出している礎石の検出を試みた。その結果、T1検出礎石の南東に2基、さらに南にも第2層中に据えられた礎石を確認した。このほか、第1層中に含まれるかたちで、20～30cm前後の礫が点在している。

これらの礎石以外では、土坑とピットを検出したが、S8は樹根の可能性が高く、ピットは並ぶ様子はない。また、古銭と鏡が出土したと伝わる主面北東の法面直下もトレンチに含めて精査を行ったが、それらしき遺構は確認できなかった。S6からはコンクリート片が出土し、現代に掘り返されたことが分かるが、先述の古銭・鏡が出土したと伝わる位置からは大きくずれる。

遺物は、第1層から第2層にかけて出土した、土師質土器を中心とした資料である。大きくは2時期に分けられ、古代に位置づけられる一群と、中世後半に位置づけられる一群がある。整地層出土であるため表面の摩滅が激しいものが多く、図化したものはその中でも器形や調整を観察することができるものである。

古代の遺物として報告するものは第21図1～5である。1は塀の底部で、高台は欠損する。外面と高台内にへら削りの跡が明瞭で、内面はへら削り後にナデ調整をする。2は内面黒色土器塀の底部である。9世紀から10世紀の所産であろう。3から5は坏で、底部には糸切りの痕跡が見られず、へら削り後のナデ調整である可能性が高い。これらも同時期に位置づけられると考えられる。

中世後半の遺物は第21図6～30である。6は小皿、7～17は坏の底部から体部である。坏は薄手の7を除いて、厚い底部から直線的に立ち上がる。18・19は鉢、20・21は甕である。19の口縁端には凹線がめぐる。20の外面はカキ目である。22～25は鍋で、内面はハケ目である。26～28は輸入陶磁器である。26は龍泉窯系青磁の皿であろう。27は口縁内面の釉を掻き落とす。28は磁州窯系の甕または壺と考えられる。黒地に白の花文を描き、線彫を施す。これらの遺物の時期については、6・7・26・27が14世紀代に位置づけ



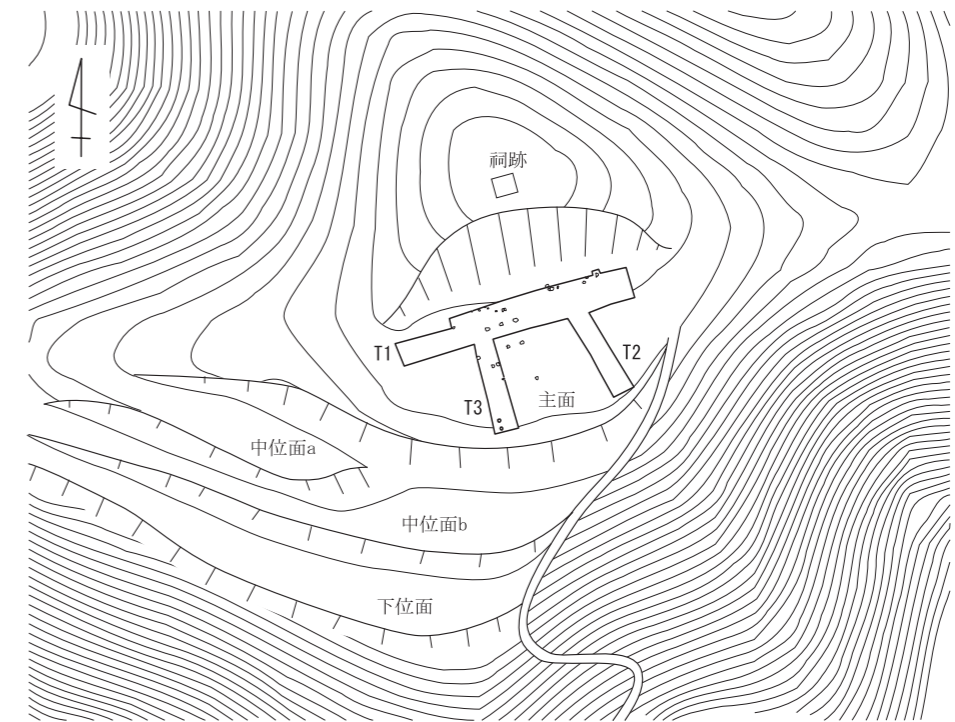
第17図 三上寺跡参道 (S=1/5,000)

られるほかは、15世紀代におさまる。このほか、金属製品がわずかに出土した。29は鉄製金具、30は青銅製の鈴である。

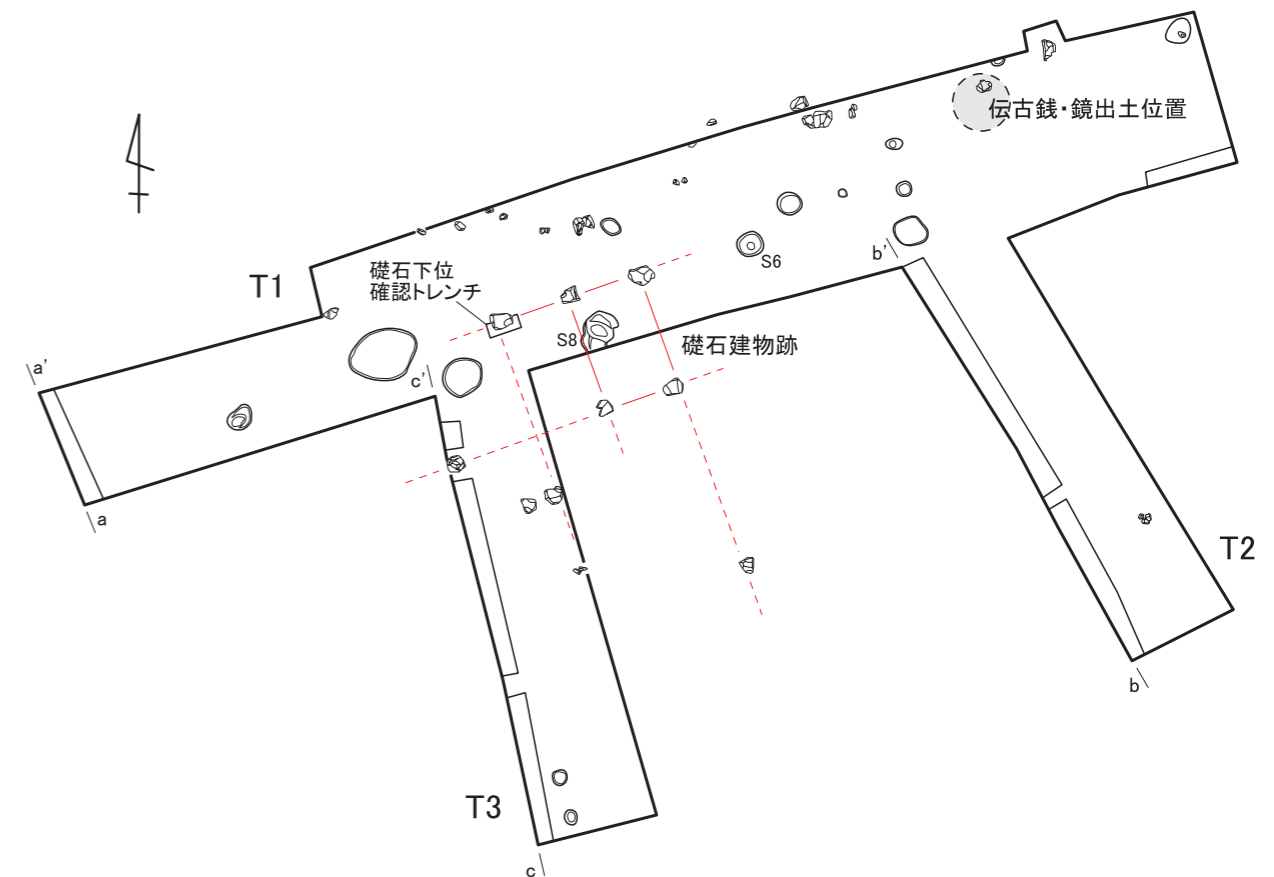
今回の調査によって、三上寺跡では15世紀頃に地形の造成が行われ、寺院と思われる礎石建物があつたことが明らかになった。16世紀以降の遺物は見られないが、様々な伝承が示すように、中世末までは存続したと考えたい。

主面の面積が限られるため、検出した礎石は本堂のものと考えて良いだろうが、全ての礎石を検出できたわけではない。地形的に本堂は主面中央に南を向いて建てられていたと考えられるものの、検出した礎石は主面の西側からのみである。遺物の出土も西側からの出土が多く、こうした検出・出土状況の違いが何に起因するかは不明である。

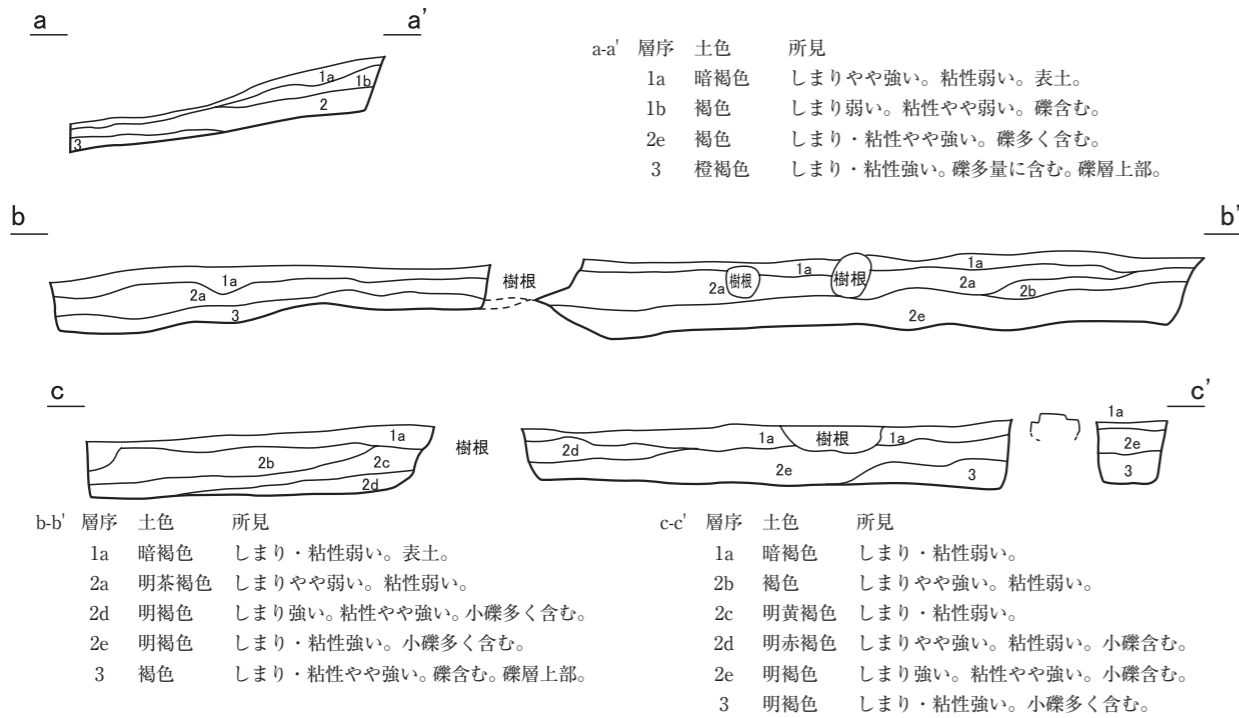
また、古代にさかのぼる遺物は予想外であった。中世までの間を埋める遺物はないが、三上寺の起源が古代の山岳信仰にあった可能性を考えなければならない。



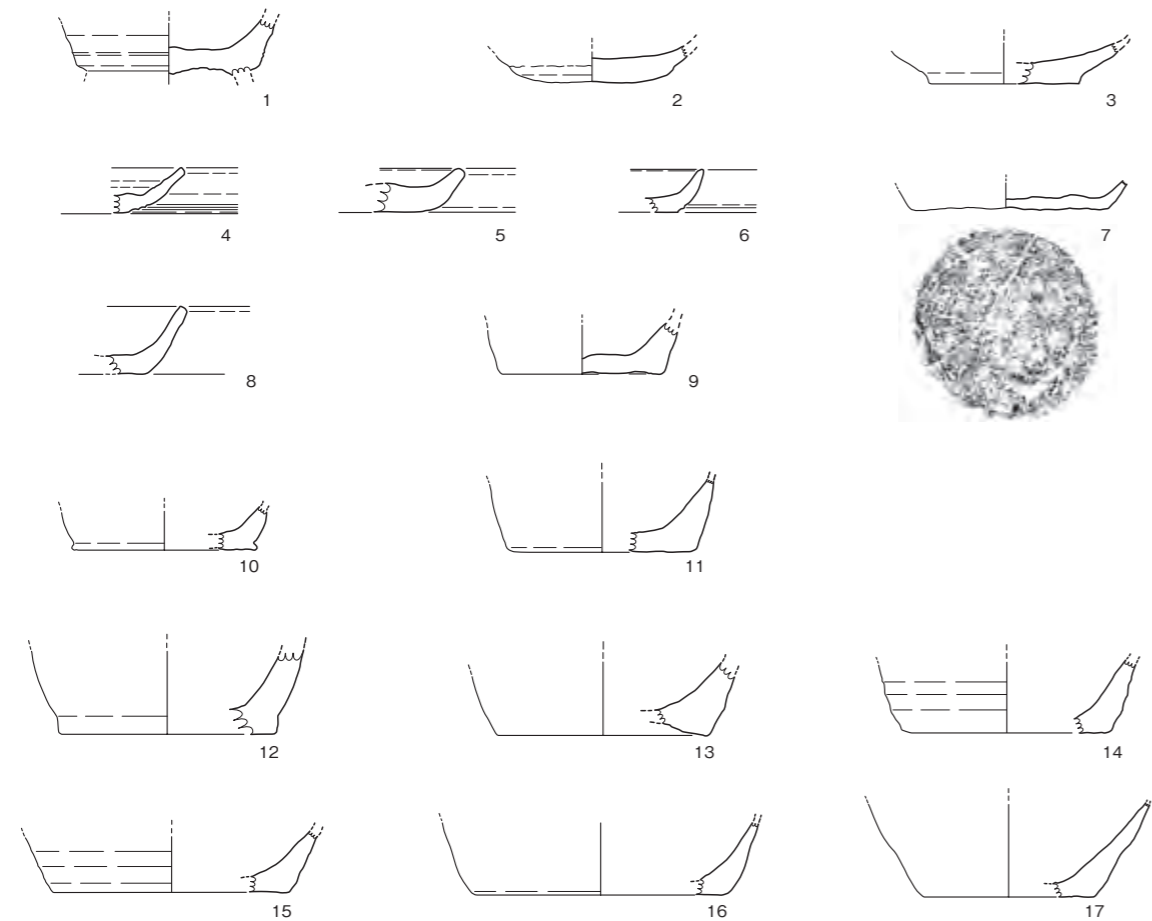
第18図 三上寺跡周辺地形図 (S=1/1,000)



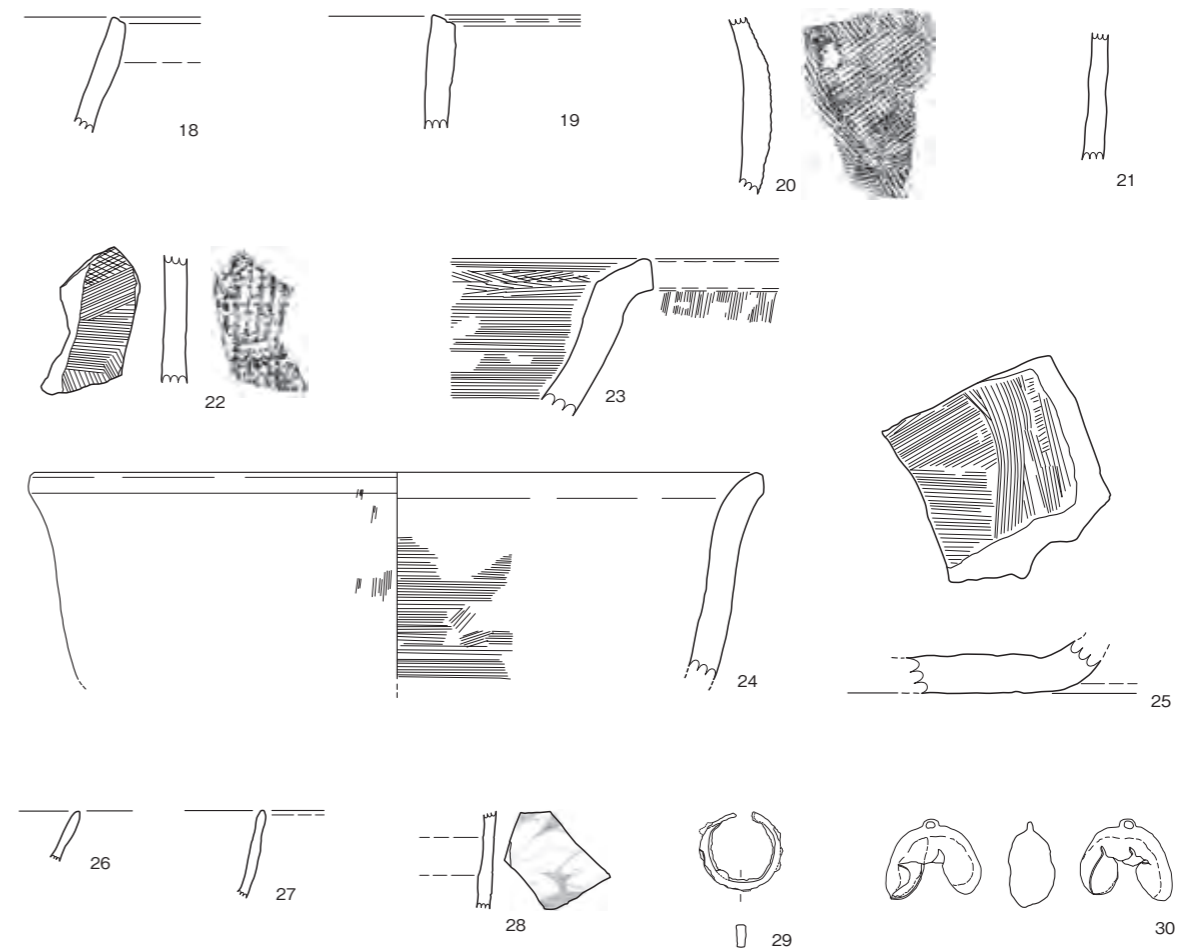
第19図 三上寺跡トレンチ平面図 (S=1/200)



第20図 三上寺跡トレンチ土層図 (S=1/80)



第21図 三上寺跡出土遺物 (S=1/3)



第22図 三上寺跡出土遺物 (S=1/3)

第1表 三上寺跡出土遺物観察表

No.	種類	器種	法量 (cm)			外面	内面	底面・高台内	釉薬・胎土・色調など
			口径	器高	底径				
1	土師質土器	碗	-	(22+a)	(5.4)	ヘラ削りのちナデ		回転へら切り	胎土に黒色・赤色砂粒含む。くすんだ黄白色。
2	黒色土器	碗	-	(1.5+a)	3.6		ミガキか?	ヘラ削りのちナデ	内面は炭素吸着、黒色。胎土に細レキを含む。くすんだ橙黄色。
3	土師質土器	坏	-	(1.6+a)	(6.0)				胎土に赤色砂粒を含む。橙黄色
4	土師質土器	坏	-	1.8	-	ヘラ削りのちナデ	ヨコナデ		橙黄色
5	土師質土器	坏	-	1.7	-				胎土に赤色砂粒、細レキ含む。くすんだ橙黄色。
6	土師質土器	小皿	-	(1.7+a)	-				くすんだ橙黄色
7	土師質土器	坏	-	(1.2+a)	8.0			回転系切り	胎土に石英粒を多く含む。淡黄灰色
8	土師質土器	坏	-	2.7	-		ナデ		胎土に赤色砂粒含む。精選されている。明灰黄色
9	土師質土器	坏	-	(2.1+a)	(6.3)				胎土に赤色砂粒を多く含む。黄橙色
10	土師質土器	坏	-	(1.6+a)	(7.4)				胎土に赤色砂粒を多く含む。橙黄色
11	土師質土器	坏	-	(2.8+a)	(7.0)				胎土に赤色砂粒を含む。精選されている。
12	土師質土器	坏	-	(3.4+a)	(8.4)	ナデ		回転系切りか?	胎土に赤色砂粒含む。赤みを帯びた黄白色
13	土師質土器	坏	-	(2.9+a)	(8.4)				黄色地に赤みをおびた、くすんだ黄色
14	土師質土器	坏	-	(2.7+a)	(8.4)	ヨコナデ			胎土に赤色砂粒を多く含む。橙黄色
15	土師質土器	坏	-	(2.4+a)	(9.4)	ヨコナデ	ナデ		胎土に赤色砂粒を多く含む。橙黄色
16	土師質土器	坏	-	(2.8+a)	(10.0)	ヨコナデ	ナデ		胎土に赤色砂粒を多く含む。橙黄色
17	土師質土器	坏	-	(3.6+a)	(6.8)	ヨコナデ	ナデ		胎土に赤色砂粒を多く含む。橙黄色
18	土師質土器	鉢	-	(4.5+a)	-	ナデ	ナデ		外面淡灰色・内面明灰黄色
19	土師質土器	鉢	-	(4.5+a)	-				外面灰黄色・内面くすんだ黄白色
20	須恵質土器	甕	-	(7.1+a)	-	カキメ			濃い風色。
21	陶器	甕×壺	-	(5.0+a)	-				輸入陶器か。胎土に黒色粒を多く含む。灰色
22	土師質土器	鍋	-	-	-	格子目タタキ	ハケ目		外面淡黄白色・内面黒灰色
23	土師質土器	鍋	-	(6.2+a)	-	ハケ目、ナデ	ハケ目		外面くすんだ赤みの黄色・内面茶色を帯びた灰色
24	瓦質土器	鍋	(28.6)	(8.2+a)	-	ハケ目、ナデ	ハケ目、ナデ		胎土に細レキ多く含む。暗い灰色
25	瓦質土器	鍋	-	(2.1+a)	-		ハケ目	ナデ	胎土に細レキ含む。暗灰色
26	磁器	皿×	-	(2.0+a)	-				青磁。龍泉窯系か
27	磁器	碗	-	(3.5+a)	-				透明釉。口縁部分の釉薬を剥き落とす
28	陶器	甕×壺	-	(3.8+a)	-	線彫り			磁器窯系。濃い風色
29	金属製品		外径 (3.2)	厚さ0.4	内径2.5				
30	金属製品	鈴	高さ (3.7)	厚さ1.8	幅3.9				

第5節 梅牟礼城東麓の詳細分布調査

平成22年度と平成23年度にかけて、別府大学文化財研究所に委託して、館を含む城下集落の詳細を把握するための詳細分布調査を実施した。対象は、城下集落推定地の梅牟礼城東麓のうち、大字稲垣と大字上岡である。調査では、現在の地名に残らない、古地名や土地にまつわる伝承を収集し、中世梅牟礼城下の構成要素の把握を試みた。近年は梅牟礼城の麓でも開発が進み、昔を知る住人も少なくなっているが、史料には現れにくい情報を得ることができた。以下に、別府大学飯沼教授と渡辺教授による調査成果をもとに報告する(第23図)。

(1) 門前

門前地区は梅牟礼城下と推定される範囲の北端にあたり、門前川の両岸を含む。門前地区には寺はないが、旧門前公民館付近に不休庵という庵があった。以前は門前川右岸の梅牟礼山裾にあり、高速道路建設のために移築することとなった。そのため、同じく移住することとなった門前住人が住む、対岸の門前団地内の新門前公民館に併設されている。庵には十一面観音像が安置され、その下位には神社に関する石造物が並べられ、一部には中世に遡る石塔も含まれている。このほか、旧不休庵のあった門前川右岸には天満宮、左岸の門前団地周辺には八幡社があったとも伝わる。

また、門前という地名の由来は、梅牟礼城の城門に位置したからであろうという話もある。しかし大分県内の門前地名は全て禅宗系寺院の門前に出発する。ここでも不休庵は禅宗系とみられ、古い段階で寺院が置かれた可能性はある。天満宮や八幡社などの存在もあり、宗教的にも経済的にも重視された場所であ

ったと推測される。

中世後半の僧侶・春好に関する伝承も伝えられる。佐伯氏の軍師を務めていた春好が三上寺に女を抱え込み、これに激怒した佐伯惟治に首を刎ねられた。その首が山頂から麓の門前まで転がり落ちてきたという。首が落ちた場所には石塔が建てられたが、近年に佐伯市が土地を造成するにあたって移転された。現在は近くの山中にある春好供養塔のそばにある。春好供養塔は、春好の墓と伝えられる板碑で、「春好座元 大永八年」の銘を観察することができる。なお、移転された石塔は15基以上あり、移転前に試掘調査を実施し、近代に集合されていたものである。

(2) 天神ノ下

天神ノ下地区は通称テンジンシタとも呼ばれる。以前に天神様があったことに由来するらしい。現在この地区に住んでいる人には、昭和19年の水害によって古市地区から移り住んできた人もいる。天神ノ下の奥にはチャエンノシタ(茶縁ノ下)がある。

(3) 掃木

掃木地区は愛宕神社の北西、梅牟礼山の斜面と裾のテラス状平坦面にあたる地区である。地区名の語源は佐伯氏家臣の伯耆守であると言われる。愛宕神社北西側の溜池は、山から水をとるためのもので、近世に藩主の命で造られたようである。

掃木地区内には屋号ウマトンヤ、コウヤが確認できる。ウマトンヤは馬問屋が由来と考えられ、コウヤは染物屋を営んでいたため、紺屋と呼ばれたものが変化した。

(4) 八戸・迫田

八戸地区は古市地区南の尾根に囲まれた沖積地である。迫田地区は八戸地区の北側の沖

積地で、今熊神社がある尾根を境とする。両地区はあわせて八迫地区と呼ばれることが多い。

八戸地区には県指定有形文化財に指定された十三重塔がある。銘文はないが型式的特徴から鎌倉期の造立と推定されている。昭和43年に八戸の深田を埋めるため十三重塔の位置する尾根を削ることになり現在地に移されたもので、本来はもう少し北西に延びていた尾根の先端にあった。さらに以前の昭和26年の大型台風で一度倒壊しており、その復元の際に塔の直下とその周囲を取り囲むように十数点の蔵骨器と経筒が出土した。これらの蔵骨器は平安末期から鎌倉期のものと推定される。

八戸地区の北に鎮座する今熊神社の下はチョウオンジと通称される。知恩寺ではないとも言われるが、詳細は不明である。また迫田地区はかつて潮谷寺の檀家であったという。潮谷寺とはチョウオンジのこととも考えられる。西大寺末寺帳には、佐伯の律宗寺院として最勝寺があり、その後に地名が記されない潮音寺が記載される。これが八戸のチョウオンジである確証は得られないが、十分にあり得るだろう。

(5) 光明寺

八迫地区から尾根の南側が字光明寺である。光明寺は茅葺きまたは藁葺きの寺であったが、荒廃により廃絶したと伝わる。善教寺や潮谷寺が近世城下町に移設されたのに対して、光明地にはその痕跡がない。中世段階で廃絶していたと考えられる。

(6) 古市

古市は現在も短冊状の地割がよく残されている地区で、佐伯市の確認調査によって13世紀後半から14世紀前半の集落が確認されてい

る。東側には番匠川の氾濫原と思われる地割が見られることから、南北朝期ころに自然堤防上に発生した市が前身であると考えられる。

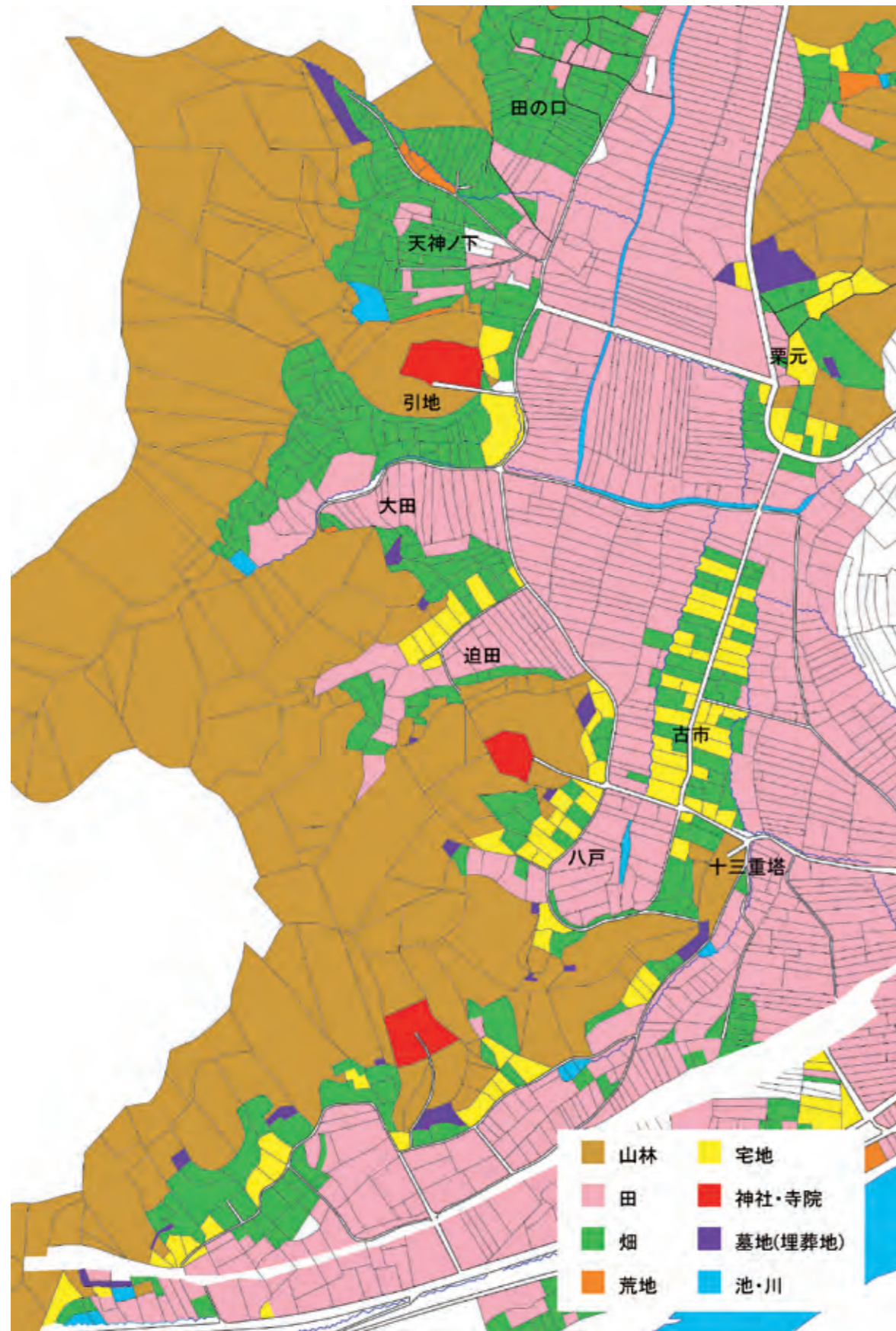
古市地区ではコジョウヤ、マエヤシキ、カサジntaxといった屋号を確認した。このうち、マエヤシキは2度の集落全体に広がった火災でも焼けなかったことから、新しい(今の)集落に対して前からの屋敷、と呼んだのがおこりだという。時代は不詳だが、近世以前の話である。カサジntaxは古市地区の南端にあり、日清戦争から戦時中以前に住んでいた人が呼んでいたという。

(7) 栗元

八迫の集落から北東に延びる自然堤防上に古市地区の短冊形地割が見られ、その先に栗元地区がある。栗元地区には善教寺があり、近世に入ると毛利氏によって近世佐伯城下町へと移された。栗元と古市の間には門前川が流れ、中世にあつてはここを潮が逆流し、その内側は潮入地になっていたと推定される。善教寺跡の位置は、天台系寺院と推測される三上寺(三乗寺)や二上寺(二乗寺)がある尾根の先端にあり、それらの寺院を前身とした可能性もある。

また、栗元地区には近年まで墓地があり、道路拡張に伴って古市地区公民館に移された。墓地は近世中期にはあったことが確認できるが、それ以前は不明である。この墓地の場所に、一乗寺があったとも言われる。

この地区では年に2回、火防せ祭りが行われる。御神体の火防地蔵は延岡の神社から分躰してもらったもので、かつては二上寺下の広場にあったものだという。現在は古市地区公民館に移されている。



第24図 明治期の古市地区周辺土地利用状況図

する。宅地の背後の斜面には小規模な墓地・埋葬地が点在し、屋敷墓や集落墓地の形態が残されている。寺院は明治期にはほとんど廃絶していたと考えられるが、分布調査によって存在が推定される位置にも墓地が確認できる。しっかりとした地盤がある宅地や畑地を除いてほぼ湿田で、その中央を門前川が流れ、栗元と古市の境から脇地区に出て番匠川に合流する。現代的な土地改良や開発による改変を受ける前の土地利用状況は、中世に開発されて以来大きな変化はないと言えるだろう。

ここまでの調査結果を見てみると、八戸・迫田から古市地区にかけて、狭い範囲に寺院跡が密集し、十三重塔が建つ。蛇行する番匠川が古市の集落そばまで流れ、周囲の湿地は満潮時には古市から奥まで船で入ることができたと思われる。同様の景観は安芸国沼田荘に見ることができる。沼田荘は律宗系寺院と考えられる万性寺が起点となる自然堤防上に、市が展開して成立する。万性寺には鎌倉期末から南北朝期の層塔などが建立されていた。

発掘調査では、屋敷地と推定される梅牟礼山の裾部では15世紀から16世紀の遺物が見られるのに対して、古市からは13世紀後半から14世紀前半と、より古い段階での成立がうかがえ、十三重塔もほぼ同時期とみられる。ま

た、番匠川南の龍護寺や檜野の慈濟院などには、十三重塔と同時期か、さらに古くさかのぼる寺院が確認できる。佐伯氏との関わりも深く、初期の佐伯氏の拠点をおこの地区に推定することも可能であろう。

すなわち、鎌倉期頃までには番匠川を利用した水運のため、自然堤防上に古市の町屋が成立し、八戸地区にはおそらく律宗系の寺院が存在した。この頃の佐伯氏の館や家臣団居住地は、番匠川対岸の龍護寺や安養寺（慈濟院）の周辺に展開していたと考えられる。

南北朝期に至り、佐伯氏が古市地区への支配を強めるため、居住地を引地地区周辺の梅牟山裾に移し、門前などに寺社を建立していった。栗元の善教寺などもこれに近い時期に建てられたものであろう。そして16世紀初頭に梅牟礼城が造られる（第25図）。さらに佐伯惟治の春好殺害について、交易による利益を得ていた宗教勢力をも支配下に置こうとする政治経済的意図があったと見ることができる。

これまで梅牟礼城下集落と言えば愛宕神社（曳地館跡）と古市の集落に視点が集まりがちであった。しかし、今回の調査によって、それらの周囲に広がる屋敷空間や寺社の配置など、具体的な景観を復元する手がかりを得られたほか、より古期の佐伯氏の拠点を推測することにもつなげることができた。

【参考資料】
 佐伯市教育委員会 1989 『佐伯氏一族の興亡 中世の秋に拾う』
 古市の生活史編さん委員会 1993 『古市の生活史』 古市歴史研究会



第25図 中世後期梅牟礼城下復元図 (S=1/12,000)

第3章 まとめ

平成元年から平成5年にかけて実施した調査によって、佐伯氏と梅牟礼城に関する基礎的な調査は実施されている。今回平成21年度から平成25年度までの調査は、課題として残されていた梅牟礼城下の様相を明らかにすることを目的としたものである。ここで、佐伯氏と梅牟礼城に関する情報を整理し、まとめとしたい。

佐伯氏の一族について

佐伯氏は、平安中期に国司として赴任し、豊後に一大勢力を築いた豊後大神氏の流れをくむ一族である。佐伯荘を開発して力をつけ、平安末期の佐伯惟康が初代と考えられている。その後、幾つかの戦乱をくり抜けながら、豊後守護職大友氏の有力な配下となっていく。

戦国期に至り梅牟礼城を築城したと言われる人物が、佐伯惟治である。惟治は大永七(1527)年に謀反を企てたとして、大友義鑑の命を受けた臼杵長景軍2万に攻められる。これに対して惟治は梅牟礼城に籠城して抵抗し、攻め落とされることはなかったが、最期は臼杵長景の策により自刃する。惟治の謀反については一次史料が少なく、後世の軍記物である『大友興廢記』『梅牟礼実録』などによって研究されているが、事実とする説と讒言であるとする説があり、真相は不明である。しかし、同様に豊後南部に大規模城郭を造るなど大きな力をつけていた朽網氏、入田氏なども、時期を同じくして大友氏に対する反抗を理由に誅せられる。このことから、大友氏が家臣団に対する強制力を強める過程において、隠然たる力を持っていた有力氏族の力を削ぐために利用されたと考えられている。特に佐

伯氏は、大神氏庶流が養子縁組等によって大友氏一族に組み込まれていく中でも血統を保っていた。そのためか、大友義鑑は佐伯氏を断絶させず、惟治の跡を甥の惟常に継がせている。『大友興廢記』によると、この時に跡目争いがあり、南の尾根先端の木戸城は惟常の兄惟勝が入った城とされる。

惟常の孫にあたる佐伯惟教は、天文十九(1550)年の大友義鎮に対する謀反に荷担している。原因は大友家臣団における大友系諸氏と大神系などの大友以外の諸氏との対立があったと見られる。計画が露見したため、惟教は一族を率いて伊予へと逃れた。しかし惟教は豊後への帰参を願っていたようで、永禄十二(1569)年頃には佐伯への復帰が許され、さらには間もなく加判衆として大友氏の政権中枢に名を連ねることとなる。異例の登用と言えるが、やはり大神系武士団への配慮があったと考えられる。天正六(1578)年に始まる大友宗麟の日向侵攻には、先陣の一人として従軍する。その結果、大友と島津が衝突した高城川原の戦い(耳川合戦)で大友方が大敗し、惟教も子の惟真・鎮忠とともに戦死している。

これ以降島津軍が佐伯沿岸を襲うが、家督を継いだ佐伯惟定が撃退している。天正十四(1586)年に本格的に開始された島津氏の豊後侵攻にあつて、島津家久が送り込んだ島津軍2千名余を堅田地区で打ち破り、佐伯への侵入を許さなかった。その後、大友氏の豊後除国により家臣団は解散し、佐伯氏は藤堂高虎に仕えることとなる。これにより佐伯氏は伊勢に移り住むこととなり、明治に至るまでその家臣として続いている。

梅牟礼城と小田山城について

梅牟礼城は標高約227mの梅牟礼山頂に築かれた山城で、佐伯惟治が築城者とされる。

最高所を主郭（曲輪Ⅰ・Ⅱ）とし、南に曲輪Ⅲ、曲輪Ⅳが広がる。曲輪Ⅱの南東には虎口、その先に虎口受けの曲輪を2段に造り、各曲輪の間には切岸や堀切を設ける。最も面積の広い曲輪Ⅳには方形の土塁状高まりが2箇所あるが、機能は不明である。これらの曲輪を、その先の尾根に築いた多数の堀切や堅堀で防衛する構造である（第26図・第27図）。

史料では2度の戦闘が記録されており、1度目は大永七年、佐伯惟治討伐のため差し向けられた大友方臼杵長景率いる二万余兵に対して、惟治が籠城したものである。一次史料に乏しいが、後世に書かれた『大友興廢記』『梅牟礼実録』に戦闘の記載がある。2度目の登場は天正十四年の島津氏の豊後侵攻に対するものである。堅田地区での戦闘は『大友家文書録』に詳しく記述があるが、梅牟礼城での戦闘の様子は不明である。

こうした文献からの検討では、築城時期や具体的な利用状況は分からなかった。そのため、詳細を解明するための確認調査が行われ、出土遺物は15世紀後半から16世紀前半の一群と、16世紀後半の一群に分類できる。これらは大永年間と天正年間、2度の合戦に対応する年代観であり、それぞれの合戦で梅牟礼城に詰めていたことを証明するものといえる。

こうした調査とともに、縄張りも海老沢衷氏と大分県教育委員会によって分析されており、堀切の中には海老沢衷氏によってβ型堀切と分類された、片側のみ堅堀が連続する特殊な堀切が指摘される。大分県教育委員会の調査によって、他に類例のない佐伯氏の独自の技法と位置づけられた。

後述するように、尾根aの先には小田山城があり、ここを臼杵長景軍の先手が陣取った小田ヶ峰と考えることができる。尾根aは7本の堀切と堅堀が連続し、梅牟礼城でも最も

厳重な警戒が敷かれていたこととも合致する。このとき『梅牟礼実録』には「七つ堀口」で激しい戦闘が行われたと記され、7本の堀切と堅堀が相当すると見られる。

また、海老沢氏は個々の遺構の築造時期判定は難しいとしながらも、主に曲輪Ⅳの南東尾根上には、畝状空堀に類似した堀切・堅堀が見られ、16世紀後半に追加された可能性があるとする。曲輪Ⅳ南西尾根が西方から攻める臼杵長景軍に対する重要地点であったと同様に、南の堅田地区から侵攻してくる島津軍に対するため、天正期に追加整備されたとする。

小田山城は、現況は主郭の南半分が削平されて消滅してしまったが、梅牟礼城とは全く違った構造をもつ城郭である。尾根頂部を平坦に削って主郭とするが、平坦面の造成はやや不徹底で、切岸も認められない。斜面には小規模な帯曲輪を連続させ、その最下段に取り付くように多数の畝状堅堀を入れ、これが主郭をほぼ全週する。曲輪を、接続する尾根を掘り切ることで防衛するのではなく、曲輪周辺の畝状堅堀を防衛ラインとする新しいコンセプトによる。弥生町によって確認調査が行われ、16世紀末葉の遺物が出土することから、現在見ることでできる縄張りは天正十四年の島津氏豊後侵攻に備えて築かれたと考えられる。先述のように、大永年間の戦闘における陣があったとも考えられるが、この時の遺構や遺物は確認されていない。しかしいずれの場合でも、梅牟礼城と別個の城・陣として築かれたことは明らかである。

梅牟礼城下の構造について

各地点での確認調査から、いずれの地点でも15世紀代の遺物が確認され、梅牟礼東麓の尾根裾部は、中世段階において生活が営まれていたと考えられる。また、愛宕神社の西と

北側は大分県教育委員会によって発掘調査が実施され、15世紀から16世紀の遺構と遺物が確認された。これら中世の遺物が出土した地点は、いずれも周囲の水田を見下ろす微高地で、尾根裾の安定した地盤の土地である。明治期以降まで宅地や畑として利用されてきた土地であり、居住地として利用可能な土地が限られていたためであろう。特に比較的広く面積をとることができる愛宕神社周辺から天神ノ下地区では、大分県の調査によって大規模な建物跡等が確認されており、有力家臣の屋敷地と推定されている。この地区を中心として、八戸や迫田の尾根裾部にも家臣団の屋敷が並んでいたと推測する。なお、愛宕神社からは中世の遺構遺物は発見されていない。とはいえ、愛宕神社の創建者は佐伯惟治と言われ、創建のきっかけは惟治の屋敷造成であるといった伝承もある。城下にとって重要な地点であったことは間違いない。

このように梅牟礼山の尾根を取り巻くように屋敷地がめぐり、その南東に古市の町屋があったと考えられる。分布調査によると、こうした屋敷地や市を取り囲むような位置に寺社が配置されていた。結果、第25図に集約されるように、中世後半には梅牟礼城と麓の屋敷地、さらに南東の河川沿いに市が開かれ、重要地点には寺社が置かれるという城下集落の景観が、門前から古市までの範囲に成立していたと考えられる。また、これら市、屋敷地、山城を結ぶ道も、現在に残されている。

なお分布調査によって、中世前半の佐伯氏の拠点が番匠川右岸の檜野から大内地区周辺にあった可能性を示す結果が得られた。この

前提にたてば、中世前半までは番匠川を挟んで市・寺院と佐伯氏の居住地が離れていたことになる。梅牟礼城築城以前の佐伯氏の拠点を示すと同時に、築城と前後して城下を古市地区に集中させた、佐伯惟治の意図を考察する上でも重要な成果である。

梅牟礼城の価値

遺跡の現状としては、山裾が一部削平されて高速道路が建設されているものの、建設に伴う発掘調査によって家臣団居住地の様相の一端が明らかとなったほか、山城の主要機能を担う曲輪や堅堀、堀切といった城郭遺構はほぼ完全な状態で残され、縄張りには佐伯氏独自の技法が見られる。梅牟礼城を含む豊後南部の大規模城郭は、大友家臣団の中でも独自の強い勢力をもつ国人領主の存在を表す遺跡と考えられ、その典型的な例と言える。一方で、その後の佐伯惟治討伐や小田山城の構造に見るように、大友氏の集権化や築城技術の変化を考察する上でも重要な遺跡である。また、城下集落と推定される古市地区周辺も開発が進みつつあるとはいえ、12世紀から16世紀の遺跡が数多く残されているほか、地名や伝承・地割などに中世の景観を推測しうる要素が残されている。

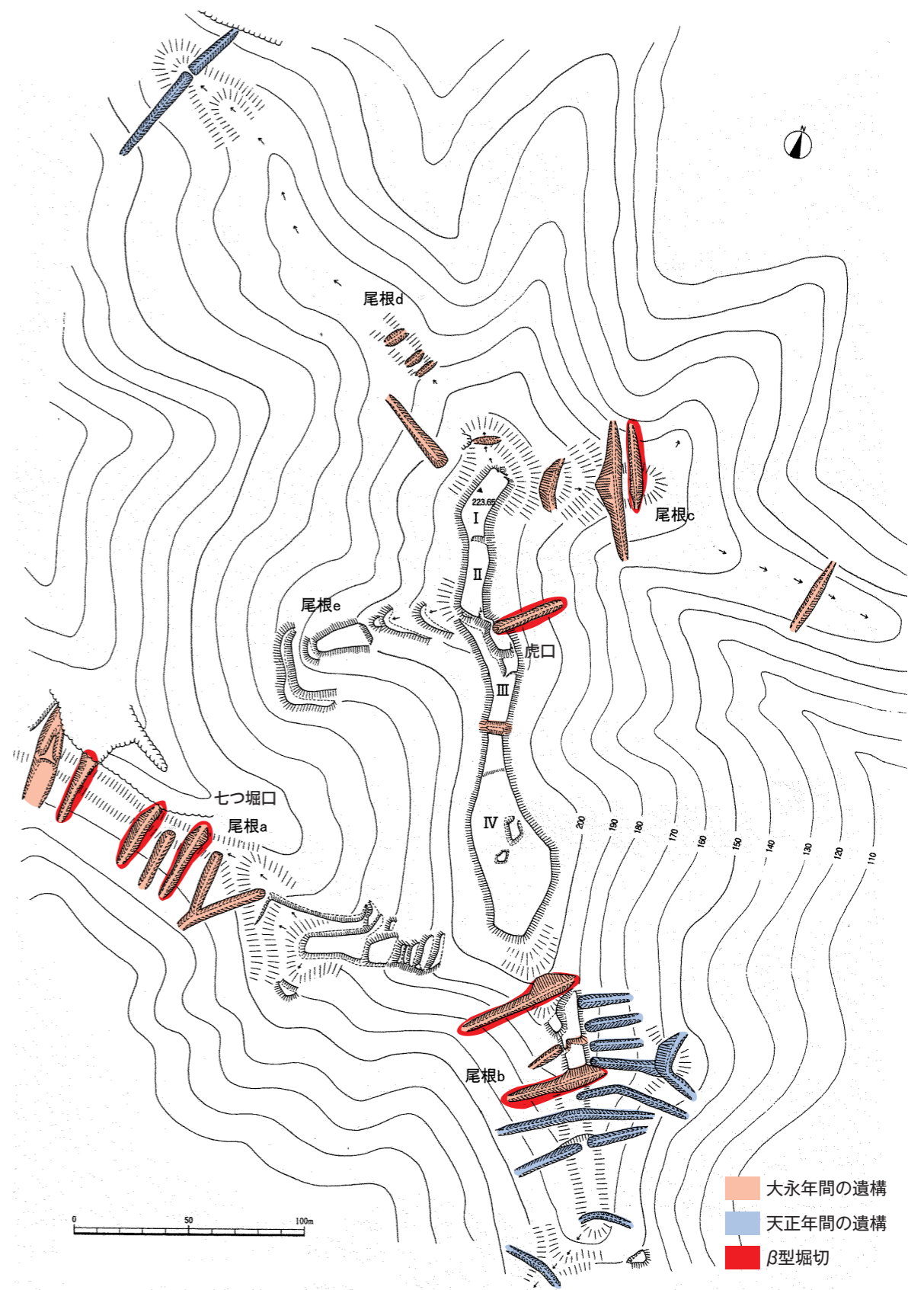
梅牟礼城周辺には12世紀から16世紀の歴史の中心となった遺跡が集中し、中世の佐伯地方を眺める上での核となる地域である。その象徴となる城郭が非常によい状態で残されている。今後も良好な保存状況を保ちつつ、後世に受け継いでいかなければならない遺跡である。

【参考文献】

大分県教育庁埋蔵文化財センター 2004 『大分の中世城館』総論編
佐伯教育委員会 1989 『佐伯氏一族の興亡 中世の秋に拾う』
佐伯市教育委員会 1994 『梅牟礼城関連遺跡発掘調査報告書』
弥生町教育委員会 1994～1996 『小田山城と関連遺跡』第1次～第3次調査報告書



第26図 梅牟礼城・小田山城周辺地形図 (S=1/5,000)
 (大分県教育庁埋蔵文化財センター 2004を一部改変)



第27図 梅牟礼城縄張り図 (S=1/2,500)
 (大分県教育庁埋蔵文化財センター 2004を一部改変)



1947年 梅牟礼城跡周辺空中写真（米軍撮影）



2008年 梅牟礼城跡周辺空中写真（国土地理院撮影）



T 1 完掘状況 北東から



T 1 土層



T 2 完掘状況 南西から



T 3 完掘状況 西から



T 3 土層西端



T 3 S 5 柱穴半截



迫田地区出土遺物



T 1 完掘状況 西から



T 1 土層東端



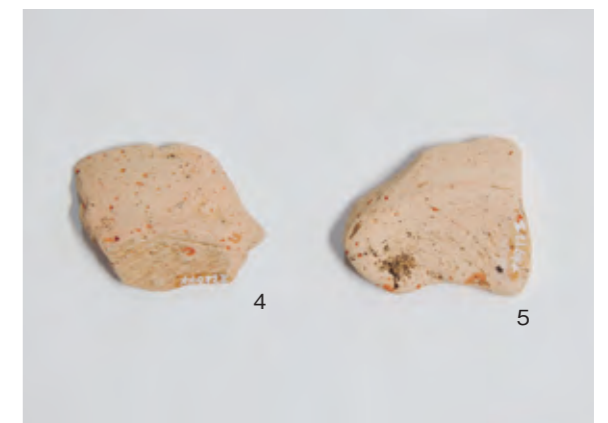
T 1 土層西端



T 2 完掘状況 南から



T 2 土層



太田地区出土遺物



T 1 完掘状況 東から



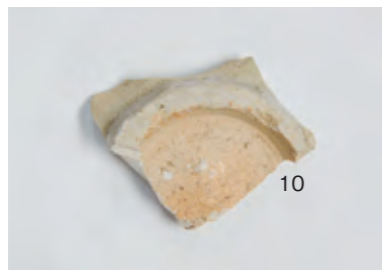
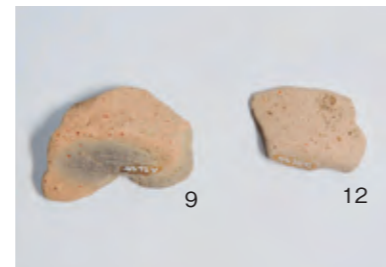
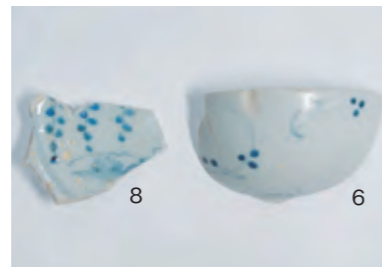
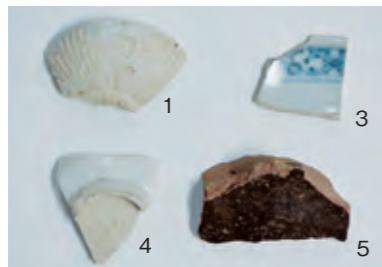
T 1 土層



T 2 完掘状況 南から



T 2 土層



八戸地区出土遺物



礎石検出状況 北から



礎石検出状況 北東から



T 1 完掘状況 西から



礎石半截状況



S 6 コンクリート片出土状況



T 2完掘状況 北から



T 2土層南端



T 3完掘状況 北から



主面北側の法面



中位面 東から



下位面 東から



山頂のお堂跡



三上寺跡遠景 南から



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



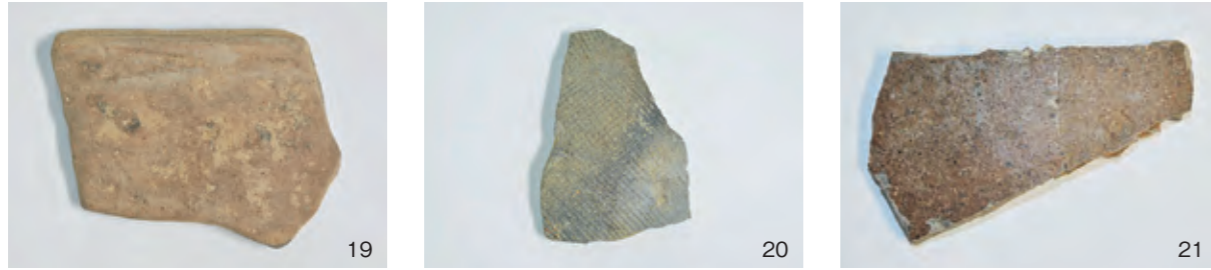
13



14



15



主郭 南から



主郭から小田山城を望む



主郭から三上寺を望む



主郭から古市・番匠川を望む



虎口 南から



曲輪Ⅳ 北から



曲輪Ⅳ南の堀切 北から



曲輪Ⅳ南の堀切断面 西から



七つ堀口東端の豎堀 南から



七つ堀口東端の豎堀断面 北から



七つ堀口東から4本目の豎堀 東から



七つ堀口西から2本目の堀切断面 南から



七つ堀口西端の堀切 東から



七つ堀口西端の堀切断面 南から



梅牟礼城遠景 東から



八戸地区 十三重塔

報告書抄録

ふりがな	とがむれじょうあとかんれんいせきはくつちょうさほうこくしょ
書名	榎牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書 2
シリーズ名	佐伯市文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	福田聡 五十川慎也
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号 TEL0972-22-4234 FAX0972-22-3912
発行年月日	2014年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とがむれいせき(さこたちく) 榎牟礼遺跡(迫田地区)	おおいたけんさいきしおおあざかみわか 大分県佐伯市大字上岡	44205	205002	32° 57' 35"	131° 51' 26"	20090904～ 20090918	50㎡	重要遺跡 確認調査
とがむれいせき(おおたちく) 榎牟礼遺跡(大田地区)	おおいたけんさいきしおおあざかみわか 大分県佐伯市大字上岡	44205	205002	32° 57' 46"	131° 51' 25"	20110201～ 20110210	40㎡	重要遺跡 確認調査
とがむれいせき(やとちく) 榎牟礼遺跡(八戸地区)	おおいたけんさいきしおおあざかみわか 大分県佐伯市大字上岡	44205	205002	32° 57' 27"	131° 51' 32"	20120124～ 20120203	24㎡	重要遺跡 確認調査
さんじょうじあと 三上寺跡	おおいたけんさいきしおおあざつるみ 大分県佐伯市大字鶴望	44205	205004	32° 57' 60"	131° 52' 05"	20130205～ 20130308	150㎡	重要遺跡 確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
榎牟礼遺跡(迫田地区)	包蔵地	近世	ピット・土杭	土師器・陶磁器	
榎牟礼遺跡(大田地区)	包蔵地	近世・近代	ピット	土師器・陶磁器	
榎牟礼遺跡(八戸地区)	包蔵地	中世・近世	溝・ピット・土杭	土師器・陶磁器	
三上寺跡	寺院	中世	礎石・ピット・土杭	土師器・瓦質土器・陶磁器・金属製品	

佐伯市文化財調査報告書第4集

榎牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書 2

2014年3月31日

発行 佐伯市教育委員会
〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号
TEL 0972-22-4234 FAX 0972-22-3912

印刷 佐伯印刷株式会社
〒876-0823 大分県佐伯市女島9032
TEL 0972-23-0170 FAX 0972-23-0171